催眠術及感應療法

山崎增造著

千古之疑問

心理之實驗

心理と生理の關係論

心性作用と感應原論

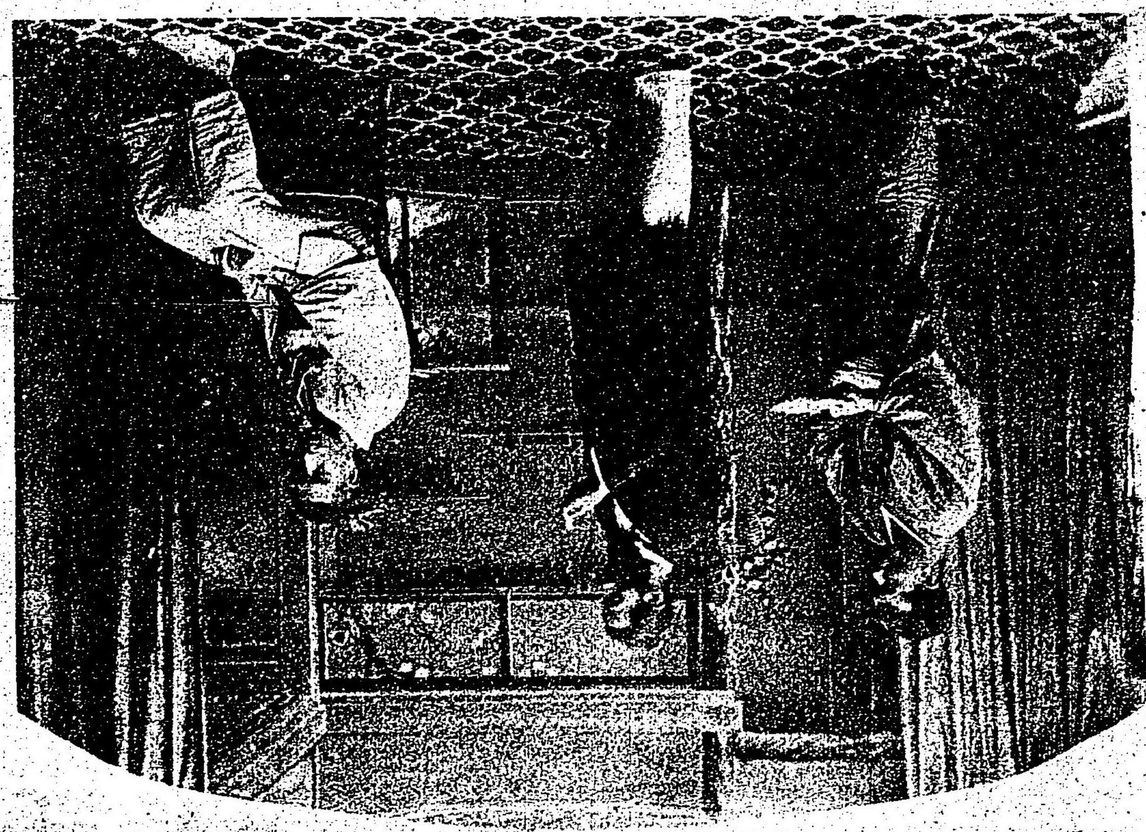
睡眠と催眠術の原理

ラッポーと推心感應法

感應療法と實驗記事

正誤

頁數	行數	字詰	誤字	正字
三	七	一、二、三	てしに	にして
一六	七	七	議	識
一七	八	六	議	識
二〇	六	四	體	髓
二九	四	二六、七、八、九	四〇〇、〇	一四〇〇、〇
二九	五	三〇、三一	三七、五	二七五、〇
三一	七	三〇	軍	運
四九	一	二七	話	信
四九	二	二六	話	信
五一	一	九	住	注
五五	一	三	に	口
五九	七	一三	催	睡
六〇	一	二四	問	間
六九	七	九、一〇	覺嗅	嗅覺
六九	七	九	髓	體
七〇	一	一四、一五、一六	にして	なり
七四	三	三	と	消し字
八二	六	二九、三〇	ち則	則ち
八二	八	一三	礙	碍
一二四	八	綴り		
一三〇	五	一〇	抱	[illegible]
一四〇	二	二八	[illegible]	[illegible]



96-317

序

醫學の發達せる今日に於て催眠感應の術を說くは野蠻未開時代に行はれたる者なりと排斥し去るの謗を免れざらんが著者を以て之を見れば決して然らざるものあり抑も醫學發達の過程を顧みるに外科的治法に於て殺菌消毒の下に偉大なる好成蹟を顯はし內科的治法に於ては顯微鏡の輝芒を極めて微菌の性質を究明するを得て斯學の發達著しく實に造化の妙技を奪はんとするに至れり而して一方藥學に於ては學理の開發技術の進步に伴ひて幾百種の新藥は日を追ふて發見せられ昨の新は今の陳となるの勢なり然り而して臨床治法を見るに三十年以前の里母那蛭は今尙ほ腸室扶斯其他の熱性病に採用せられ又十數年前の「クレオソート」

は現に結核患者に重要視せらるれども而も未だ治病的の効ありと云ふを得ず彼の弊斯的里思者及び其他の神經系病者に對する投劑は一般規則として何人も古來慣用の處方を廢する能はざるが如く未だ幾百の新藥中是れ以上の確實なる良劑あるを知らず爲に該患者等は未だ醫學發達の慶に浴するこゝ能はずして幾年月の間不幸なる病苦中に呻吟しつゝあるにあらずや。

近歲僅に實扶的里亞の血清療法發明せられたりと雖も結核に於ける「ツベルクリン」腸窒扶斯及び赤痢病に於ける治療液、虎列拉、百斯篤の豫防注射液は其効力果して吾人の信用すべき程のものなるや否甚だ疑はしきものありて世間之に向つて否定の例證を擧ぐるもの少なからず是に依つて之を觀れば醫學の進歩之を昔代に比すれば著しき相違あるべしと雖

も猶未だ理論と實際との調和を期すべからず思ふに理論如何に完美なりと雖も之を實際に施して効なき時は徒に空談のみ殊に醫治の道は床に臨んで病者の苦痛を治するが一大目的なり里俗に論より證據といふ事あり是れ醫家の須らく服膺すべき言ならずや彼の遺尿症の如き極めて單純なるものと雖も今日に於て未だ容易に根治すべき妙術なきにあらずや以て見るべし醫家の現狀は證據より議論を貴ぶの傾向あるを免れざるを豈に斯業の爲め痛嘆せざるべけんや。

請ふ理論と實際との調和せざる結果は遂に病者をして如何なる不幸に陷らしむるかを想察せよ著者の觀る所に依れば病者は醫師の療法の存外賴み少きに失望して轉じて何の効力もなき賣藥の効能書きに迷ひ徒に藥舘の服を肥さしむるか否らずんば淫祠邪教の誣說に心醉し其加持祈禱に依

りて病苦より免れんとするに至る是れ誠に悲しむべき現象たるのみならず實に醫學の面目に關する一大恥辱と謂はざるべからず茲に於てか吾人は寧ろ實藥の無効に嘆々を費さんより又加持祈禱の無益有害を嗚らさんより將又高尚なる理論を以て醫學壇上に時ならぬ花を咲かせんよりも先づ臨床的實際療治の方法を講究するの勝れるを說かざる能はず淵に臨んで魚を羨まんより退いて網を結ぶに若かずとは是れ吾人が此著を成す一大精神なり。

吾人が茲に催眠術に依る感應療法を說く蓋し偶然にあらざるなり此療法は古代より西洋及我國に於て行はれたるものなれども愈々一個の學說として心理學者の注意を惹くに至りしは最近數十年間の事に屬し未開時代の遺物も亦漸くにして眞理の光明を放たんとし今や諸種の方面に於て

試驗の結果其眼者の深く注目する所となれり余輩の之を應用したる實驗に依るに慢性頑癇にして百方治術を施すも効なき腰痛の如き子宮周圍の附屬器に於ける硬攣症、神經系諸症其他の諸症に偉大の効あるを信認するに至れり然れども多數の學者は皮相の觀察を以て之を批難し又從來生理的催眠術を既弄して癲狂患者に試みたるものは一言の下に無効として排斥せんとすと雖も元來催眠術は暗示(感應法)を行ふ法の巧拙に依りて始めて効力を生ずるものなれば之を行はざる輩の全然失敗を招くは固より其所にして殊に癲狂者の如き既に意識上に變態を來したるものに對しては感應法を行ひ難く心理學上無効なること又言を須たず然るに未だ深く其眞相を識別せずして直に之れが無益を主張し方角違ひの批難を逞ふして斯術の進路を妨げんとするが如きは甚しき輕躁の言動と謂はざる

べからず余輩は此の如き人士の速に皮相の謬見を抛ちて心を斯業に潛め幾百千年來埋沒せられたる眞理の光明を發揮せんことを切望せざるを得ず。

曾て催眠術が佛國學士會の一問題となり之を批難するものありたる當時「テロン」は之を辯じて曰く催眠術は假令想像作用の結果なりとするも其の治療上に効ある以上は何を苦しんで之を用ゐざるかと、誠に然り治療學上最終の目的は苦惱を鎮め疾病を去るに外ならざれば苟も之を去るの手段あらば其想像作用なると錯誤たることを論ずるを要せざるなり著者淺學寡聞と雖も常に幾多の患者に接し實驗上固く信ずる所あり故に先輩心理學者の諸說を參照し以て實驗する所を記述し斯術の發達を期せんとす讀者微志の存する所を諒せられよ。

明治三十六年八月十日

著者誌

凡例

一此書の主旨は、初學者をして、催眠術と感應療法(實は推心感應療法)を實地に應用し、治病學上に一大裨補あることを知らしめ、且つ斯術研究の便に供せんとするに在るのみ、素より淺學の余輩深遠なる、學說を主張し、世に立んとする者に非らず、其の記述する所は專ら先學者の通說に賴り斯術の實行上研習に必要なる諸點を、摘載記述するに過ぎざるなり

一此書を記述するに當りて參照引用したる書籍、雜誌の名目を擧ぐれば左の如し

一哲學論綱　　リギョール氏口述

一唯物論と靈性論　全　氏著
一哲學概論綱要　文學士加藤玄智氏著
一通俗教授心理學　井上圓了先生著述
一哲學館講義錄妖怪學　全
一催眠術　文學士花澤浮州氏著
一秘法催眠術傳授書　指月道士演述
一仙術と忍術　菅原如庵 加藤孤燕氏合著
一人心觀破術　近藤嘉三氏著
一幻術の理法附神と幽靈　近藤不二氏著
一不死長生の魔術　近藤嘉三氏著
一魔術と催眠術

一學理應用催眠術自在　竹內栢三氏纂譯
一感應術及催眠秘訣　宮永勇氏著
一神經學會雜誌　日本神經學會
一性相學精義　石龍子著
一解剖大全　醫學士奈良坂源一郎氏著
一蘭氏生理學　山田良叔氏譯
一解剖生理及衛生　醫學士宮島滿治氏纂著
一驚傑兒生理學　醫學士川原汎氏撰
一精神病學提綱　金子馬治氏述
一心理學
一Text book Psychology（ヒームス氏心理學）

La Psychologie du Raisonnement.
Recherches Expérimentale
Par le Hypnotism.
Attentions de la Personalite (ジャネー氏)

催眠術及感應療法目次

第一章　緒言……一頁
第二章　催眠術と感應療法の區別……三
第三章　精神と身體の關係……六
第四章　身體組織……八
第五章　神經系統……一三
第六章　腦髓性質……一六
反射機中樞—意識中樞
第七章　神經事情と意識過程の關係……二六

催眠術及感應療法目次

第一章　緒言……一頁
第二章　催眠術と感應療法の區別……三
第三章　精神と身體の關係……六
第四章　身體組織……八
第五章　神經系統……一三
第六章　腦髓性質……一六
　　反射機中樞—意識中樞
第七章　神經事情と意識過程の關係……二六

第八章　情感……三一
第九章　心性起原説……三二
第十章　物心兩界……三五
第十一章　心象論……三七
第十二章　心性論……四五
第十三章　感應論……四八
第十四章　睡眠論……五九
第十五章　生理的催眠術……七〇
第十六章　心理的催眠術……七四

第十七章　醒覺法……八六
第十八章　催眠の難易……八七
第十九章　催眠狀態……八九
第二十章　アンヲッポー……一〇三
第二十一章　推心感應法（命令又は暗示）……一一四
第二十二章　感應療法……一二四
第二十三章　迷信的現象の二三眞相……一四二
第二十四章　推心感應法の前途難……一四六

目次終

催眠術及感應療法

山崎增造著

第一章　緒言

茲に陳說せんとする催眠術及感應法は暗示（Suggestion）に依りて病者を治療せんとするにありて事は心理學上の問題に係れり、蓋し世に怪談奇說少からずと雖も就中暗示によりて起れる現象ほど不可思議なるはなからん、文明人は之を以て邪說として排斥し、或は精神の錯誤として科學の名の下に一笑に附して顧みず、「メスメル」以來偶々之れが眞理研究を企てたる人な

きにあらざるも、多くは荒誕不稽の說として久しく學術界に埋沒せられ、唯だ未開人が鬼神の靈驗として敬信し、魔狐の奇術として惑溺し僅に其命脈を傳へたるに過ぎず、然るに輓近に及んで歐米心理學者中此現象に着眼し、敢て藐視するこなく試驗的に研究するに至れるは誠に興味あること、いふべし、而して此試驗的施術を通常催眠術と稱し近時我國にても心理的催眠術と名けて斯術を講窮するもの漸く多きを致し、諸多の目的に應用せられんとするの勢を呈するに至れり、余淺學にして未だ其理を窮竅し盡したるにあらざるも、聊か實地經驗上得る所あり、殊に感化的及治病的に應用して著大なる効力あるを信するが故に、茲に催眠術及感應療法と題し、初學

者をして自ら研究するの資料に供し、且つ未學の人をして斯術の興味を知らしめ、實地に應用して同じく其福利に與からしめんこ欲す、請ふ之より序を追ふて叙說する所あらん。

第二章　催眠術こ感應法の區別及其効用

感應療法を研究せんこする者は先づ催眠術こ感應法の一斑を知り且つ之が施術に熟達するを要す、而して催眠術こは人工的に他人を睡眠せしむる術てしに、從來生理學上試驗的に研究せられたるものなれど、單に生理的に睡眠せしむるのみにては通常の睡眠こ同一にして、晝寐こ何ぞ擇ばんや、余輩

の所謂催眠術は他人を催眠せしめたる時に乘じて感應法を施し、心理的に感受せしむるを以て目的と爲す、故に之を一に心理的催眠術と稱し、其催眠したる有樣を催眠狀態と名け普通睡眠と區別せらるゝなり。

然れども催眠術と感應法とは全然別事たることを忘るべからず、何となれば如何に催眠術に熟達すると雖も之に感應法を施さゞれば何等の現象をも生ずることなく、又之を施すも其法拙劣にして宜しきを得ず、術者の言語曖昧なるか意思不確實なる時は、啻に何等の効果を來さゞるのみならず、却て受感者に甚しき苦痛を與ふるものなり、如斯催眠術と感應法とは區別あるものなれども、此兩者を併せて研究實踐せば、醫家が其治療上著大の功蹟を奏するは今更いふまでもなく、敎育家は兒童幷に青年の惡癖を矯正し、其記憶力を增し且吶を治し朝寢晝寢を防遏せしめ、宗敎家は信仰を高むる方便として之を用ゆべく、商家は商略上の機先を制して大利を博すべく、貴紳富豪は交際場裏の狀勢を洞察し、且つ出入者の擧動、奴婢の性質等を知るを得べく、軍人として敵の動作を探索するに於て斥候的任務に利用することを得ん、而して之を感化上に用ゆるも、禁酒禁烟を實行せしめ又放蕩者をして自ら戒愼せしむるに於て効果鮮なからず、其の何が故に然るかは後章に於て之を明かにすることを得んが、茲には先づ精神と身體との關係を說き以て病を治し、未知未然を確知する所以に及ばんとす。

第三章　精神と身體との關係

身體は精神の宿る處なりとは古來より言い傳ふる所にして、兩者の自ら別なることは西人の諺にして何人も知るべしと雖ども、其密切なる關係に至ては近世心理學の發達したる結果に須つて知らざるべからず、蓋し眼ありと雖も視るべき意識なければ事物を色別する能はず、耳ありと雖も聽くべき意識なければ音響を聽取する能はず、筋肉の機能備はれりと雖も運動すべき意識なければ、身體は是れ一種の複雜せる機關たるに過ぎざるなり、是を以て考ふれば吾人の身體中には精神即ち意識の存在して、外部より來る感觸に對し一々反動を與ふるを知るべし、而して之れが順序を細說すれば眼若くは耳に於ける或印象は直に傳波して意識に變化を生じ、意識の變化は直に執意となりて筋肉の收縮を來す、而も是等の關係を尙一層適切に說明せんと欲せば、神經機能と意識事情上の範圍に入らざるべからざれども、茲に之が條理を立つるは事繁細に渉りて、速解に困難の節なきにあらざるを以て、唯だ之を概說するに止めんに、右の筋肉の收縮は神經中樞の灰白質に衝動を受けたる時のみ意識に變化を生じ、感官の印象は腦髓に傳達すべき衝動を受けたる時感覺を生するものにして、此事情に於ける神經纖維の或部分は中間の連鎖となりて傳導し、灰白質と直接に關係せる神經に變化

を生ずる時は其結果意識に及ぼすものなり。

然らば則ち吾人の身體中に發動する精神即ち心性は、身體中の如何なる部分に存在するかを究めさるべからざれども、之を究めんと欲せば先づ全身の組織を考定するの要ありとす、請ふ之を左に述べん。

第四章　身體組織

抑も人の身體組織は通常之を五種に分てり、曰く神經、筋肉、皮膚、血液、生殖器是れなり、若し之を作用上より分つ時は營養機能、運動機能、輸送機能の三と爲す、而して營養機能は腸、胃、肺等の營む所、運動機能は神經、筋肉

の營む所、輸送機能は心臟血管の營む所にして、余輩の窮めんとする心性は則ち神經中に存するものと定め、茲に人體全部の組織を說かんとす。

凡そ有機體は動植物の別なく細胞より成るものにして、人類の如き上級動物も諸種の細胞集積して其形を構成するなり、此の細胞は自己の發育を保持するが爲めに斷へず物質の補給を要し、其補給物は化學的に變化して一箇若くは數箇の新物を生し、其の一半は細胞の營養となり、他半は再び排泄物となる、斯の如き營養排泄の機轉を植物系機能と云ひ、之に反して動物系機能は只動物にのみ限存する者にして、筋肉及神經作用に由りて生ずる感覺運動及思察の如きを云ふ、消化、分泌、呼吸機の如きは植物系機能に屬す、

之れ血行に由りて生する營養排泄の機官なればなり。

動物の体軀には其内部に消化吸收の器根を備へ、又特立に酸化機關を存し、植物より有機性複合体を取り、再び大氣及土中に之を無機性の形態となして償却す、斯の如く間斷なく體中に行はるゝ酸化機轉をなすには、肺に由りて酸素を血液に輸し、又血液に依て之を全身の諸組織に輸送するを要す、而して此の酸化轉機を總稱して生活と云ふ、故に暫時の間此酸素の輸入缺乏する時は生活を斷つに至るべし、蓋し酸化機の効用斯の如くなれば、又之に供する可酸化物なき能はず、是れ體の張力を補給するものなれば、必ず一部去れば次で新に輸入補償せざる可らざるは論を俟たざるなり、然り而して

此の輸入は酸素より長時の間歇を以て消化器中に採收せらるゝものにして、其採收せる食餌は軀體の結構に要あるものと、夫の消費物を償ふに要あるものとを名けて營養質と云ふ、故に此の可酸化物は必ず有機複雜の物にあらずんば能はざるなり、何となれば斯く容易に酸化する性あるものは、無機物に就而は之れなき所なり、人類及び動物は必ず新鮮なる動植物より自家の營養分を取らさるべからず、故に動物の世にある必ず植物なくんば能はざるなり、又植物は土質及び空氣より無機成分を取りて、夫の動物の生活に缺く可からざる所の可燃的有機體を造成す、蓋し肉食獸と雖も間接に植物を食するものなり、何となれば植食獸は彼れか食する所となればなり。

無機域に就而直ちに動物の食料となる可き物質は甚だ少なし、就中最要なるは酸素に次で水なり、……水は全身中の諸器に於て、代謝機即ち酸化機に依りて生ずる所の物質を再び體外に排泄し、又之れを補ふの機轉を媒介するものなり、故に生類は絶ゑず水液を胃に求め、腎に皮膚に肺に之れを排泄して、其の流通恰も泉流の間斷なきが如し、水は營養質を溶解するの性質あり。

水の外に二二の無機性鹽類にして體質結構に要あるものあり、殊に食鹽を第一とす、次に眞の鹽類にして其の金屬は「カリユーム」、那篤倫母。加爾斐母。苦土。鐵にして其の酸類は鹽素。硫酸。燐酸等なり。

第五章　神經系統

神經系統の分類は「ビーシャット」氏の創立する所に從へば、全系統を二類に分別せり、即ち動物性神經系統及植物性神經系統之れなり。

動物性神經系統とは腦髓。脊髓及び之れに屬する神經を總稱するなり、故に又此の系統を腦脊髓系統と名く、腦脊髓は人間精神の舍る所にして知覺及び運動の中央府なり。

植物性神經系統とは、一名交感神經系統と稱す、總て植物性の現象を主宰する者にして、更に精神の命令に關せず不隨意に發する運動の主府なり、例之

ば營養分泌等に關する運動の如し、故に亦一に之を名けて有機神經一名內臟神經系統と云ふ、斯の如く兩系統を分つと雖ども又是れを判然區別すること能はず、如何となれば此の兩系統の神經纖維互に交換して頗る混合し、自ら一聯の神經系統となるに因る、高等動物に在ては此の交感神經系統多しと雖ども、下等動物に至りては全く動物性神經系統のみなり、又神經の原質上より之れを分てば二種となるなり(一)神經纖維又神經小纖維(二)神經細胞又神經節細胞是なり。

神經纖維は微細延長の形器にして、結締織の爲め數條收束せられて一條の索又は結締織の鞘を有し、以て通常所謂神經と稱する白色の帶索を構成す、而して此神經纖維は傳導を司るものとす、其の傳導作用の狀況に由り又二種の別あり、一は求心性神經と云ひ、一は遠心性神經と云ふ、求心性神經は、末端に受くる所の刺戟を中樞に向て傳導し、遠心性神經は、其中樞に起る所の興奮を末端に向て傳導するものとす、故に知覺感覺作用を導く所の神經は求心性に屬し、運動を導く所の神經は遠心性に屬す。

神經細胞又節細胞は同じく極めて細柔なる膜を有し、膜中に多少粘稠なる液質を含有す、而して「ベアーレ」氏は此の液質中に微細なる纖維網を撿出せり、又胞の稍や中心を離れし所に一箇或は數箇の核體を見る、此の神經細胞は突起を有し、之に依りて神經纖維と繫連す、而して此の神經細胞は中樞作

用を司どるものにして、求心遠心の二神經の中間に位して二者を連續するを以て中心神經と稱す、此の中心神經にも數多の種類あり、之を大別すれば腦髓。延髓。脊髓。神經節の四種とす、而して四種の中腦髓は中樞器の最高等に位するを以て、之を中央傳信本局に比する時は他は各地の分局に比すべし、故に腦髓を精神の本位と定むべき也。

第六章　腦髓性質

反射機中樞—意議中樞

腦髓の性質を知るには、他の中樞作用を司どる神經系統の樞器を知るを要す、即ち脊髓は細胞と神經纖維とより成る、上端は頭蓋腔中に入りて延髓に移行し、其の神經纖維の末端は身體各部に分布し、起根は脊髓と連結するのみならず、其の纖維束は脊髓に添ふて白質中に達するものあれども、此の脊髓中樞は大腦の皮質と關係なく、全く獨立して傳導を司どるを主とし、其作用は反射的に屬し毫も意志の命令を待たずして起る、故に之を自動作用又不隨意作用と稱す、即ち求心性神經より傳ふる所の刺戟を受けて、直ちに遠心性神經に移し反響するものにして、此の過程中意織には感知せざるものなり、爰に意議中樞と反射機中樞の各自獨立作用を例せんに、蛙の大腦を脱去せば、忽ち自動的運動を爲すこと能はざるに至るも、受動的運動を爲すこ

とは敢て常と異なることなきを見る如し、又人の熟睡したる時輕く其手足に觸るれば、直に其位置を他に轉ずるが如き、又脊髓を損傷して其上部と下部との連絡を絶ちたる人の足の裏に觸るれば、直に之を他に運ばすと雖ども自ら少しも知覺せざるが如き、是れ皆な反射運動に外ならずして、亦た自動作用の存する所以を知るに足るべし。

其他眼の瞳孔は光線の强弱に由りて縮張し、呼吸消化嚏咳嗽等の如き皆な反射機能なり、又脊髓は反射即ち自動作用の外に意識の命令を傳へて運爲作用を營むことあり之を隨意作用と云ふ、即ち意識に從て手足を運動するが如き是なり、延髓も脊髓と同じく纖維と細胞を含有し傳導と中樞の兩作

用を司どるなり、消化呼吸作用其他手足の不隨意運動を爲す亦た凡て反射的自動とす、就中延髓には生活點、密尿點と稱する貴要部あり、生活點とは此の部に針尖程の刺戟を受くるも速時に致命の大事を惹起し又密尿點とは此の部に些との刺戟を蒙むるも忽ち尿中に糖分を排泄するが故に此く命名せらるれども脊髓延髓の中樞中には精神機能を顯有するにはあらず此は此部分が劣等中樞ことせらるゝに依つて知るべき也若し意識が熱心に或る事物に疑集する時は、縱令皮質を外界より刺戟するも殆ど之を感せざるか、若しくは單に反射運動を爲すに過ぎずして其人は無意識なるが如きことあり、之れを要するに大腦皮質は直接に吾人の意識と相關係し反射運動は單に同

一の刺戟を求心的に感受し直ちに反響して遠心的に活動すること云ふに過ぎざるなり。

意識の中樞に就ては古來數說ありて未だ一定する所を知らずと雖ども余輩は是等の爭議如何に關することなく神經作用を考察して意識過程の如何に關係するかを說示すべし、而し神經作用を知らんとするには先づ腦髓の性質より講究するを要す。

抑も人類の腦髓は、神經系統中最高等に位して其構造複雜を極め、從て其作用も奇奇妙妙神變不思議の機能を有するを見る、此腦髓は固より他の動物にも存すれども、發育構造共に不完全なるを以て其作用も亦た人類の如く

敢て奇妙と稱すべきものなし、蓋し腦髓は通常大小の二種に分たる、小腦は大腦の後下部にありて、其作用詳かならざるも其任は規整運動を主宰するにあるが如く、動物より小腦を除去し或は之れを毀傷する時は、直に運動規律を失し正しく行走游泳飛行すること能はざるに依つて證するを得、然れども未だ死人たるに至らざるより見れば、精神は此小腦中に含るものにあらずして、其上部なる大腦中に在るものと斷定せざるを得ず、今若し大腦を破損するか或は之を除去すれば、其の生體は全く機能を失ひ自ら運動を發することなく、僅かに內外の刺戟に依りて反射運動を表示するに過ぎず、而も外物との衝突を避くることを知らずして、衝突すれば直ちに其運動を中

止す、是を以て推考するに、精神即ち心性作用は蓋し大腦半球に局在するものと知るべし、故に大腦半球は精神官能の所在にして、智力。情感。意志の三機能悉く之れに因りて起る者こす。

更に大腦の構造を考ふるに大腦は腦中の最大部を占め、左右兩半球より成り外面は灰白色にして許多の穹窿盤曲を呈す、之れを廻轉と云ひ其の內部は白質より成る、而して、皮質部即ち灰白質部は實に精神即ち心性作用の發動點なりこは前項說く所なれども、其の因て起る所以の理は未だ明に知るを得ず、蓋し各部に於て營爲する作用は同一ならざるも、各種作用の位置を推知すること能はず、今日纔かに識る所の者は感覺及び運動に就て特殊の作用を現出するのみにして、此は動物試驗及び人類の病態より得たる結果こす、其の一例を擧ぐれば彼の失語症の如し、此症には運動失語症と感覺失語症この二種ありて、之に關する腦髓は特殊の部分あるが如し、又大腦の一部分を刺戟し或は除去して身體の一定部分に、知覺或は運動の起滅する反應を見て、各部同一の作用を有せざることを想像し得るのみ、故に心性は大腦中何れの部分に起り、諸細胞は如何に變化して其の妙用を呈するかに至りては、今日の生理學者も未だ之を發明する能はずして如何なる理學者も爰に至りて望洋の嘆を發せざるはなし、例之ば匣中に珍書を藏するこは確實なれども、秘して之れを人に示さゞる如く、造物者亦た其妙工を吝むに

あらざるかの感あり、故に人身の生靈なる者何れの所に存在するやは素より知る可らざるなり、是を器械的及び化學的に想像するも素より説明すべき端緒を得るに術なし、今を距ること殆んど二百年前、ハントニー言ることあり曰く脳の織質及び其病理的變常は甚だ不明なり、又其の生理的官能に到りても最も曖昧に屬すゞ、蓋し此の語は文運進歩したりといへる二百年後の今日に至るも、尚ほ屢々人の引證を受くるより見れば、總て人間精神の力を以て究極し能はざる、精妙不識の官能を究明せんこと頗る困難の事業たるを知るべし。

蓋し思ふに人の生靈なる者は、人身中の物質化成の集積せるものならんこ

とは稍や信すべきが如しと雖も、而も又是れを證明するには余輩と雖も躊躇の念なき能はず、此の物質化成なる者は體中一切の機關に依りて悉く營爲されたる最要點にして、必ず缺くることなく又必ず一定の順次を經過して組織されたるものなることは疑を容れず、若し余輩の推定の如く人間の生靈は脳髓の物質各自の生活力相合したる現象に外ならざる時は、其官能の知る可らざる素より論を待たざる所にして、蓋し脳中物質の化成なる者は物質の運動と見做さゞるを得ず、例へば新陳代謝分子の集合及び顫動等の如し、然れ共此の運動は決して自ら發起し得る者ならざれば之を誘起する一種の力なくんばある可からず、故に此の一種の力と、此力に因て誘起せ

られたる運動をして人間の精神に變成せしむる所の機轉を撿索するは最も要件なるに到底吾人の智識を以てしては此二件は撿索し得る者に非されは唯々假想の説を以て實を窺がふに止るのみ。

第七章　神經事情と意識過程の關係

神經作用の意識過程に關係することは既に論ずる如く、或る程度までは生理學上の事實に徴して説明することを得べしと雖も、大部分は推理的假定に依るの外なし、然れども種々の事情に照らし腦中に心性の存することは疑ふべからざるなり、而して腦髓及び延髓脊髓の心性と關係あることは前に既に論したれども、之に次くものは五官神經(眼、耳、鼻、舌、皮膚に分布する神經を云ふ)にして、此神經は腦髓より直ちに發するものと、脊髓を經て分布するものとの別あり、其他身體諸組織諸機關は皆な多少意識過程に關係を有せざるはなしと雖ども就中直接に關係するものは神經系統なり、今其の過程に伴ふ所以を左に枚擧せん。

世諺に健全なる身體には健全なる精神含ると云ふことあり、其意は心性に異狀あれば身體組織に異狀を起し、血液に變調あれば神經系の營養に變調を來たし、從て精神機能に影響する諸關係を表はしたるものなり、神經毀傷し若しくは錯亂癈絶するときは感覺運動に變化を生し、精神機能變態し、精

神過勞する時は、身體に疲勞を生し、且つ頭部に痛感を生す、之に反し休息又は睡眠せし後は、精神作用活潑となり、精神機能の發達したるものは、神經系の組織完全するを見るも皆な此理にして複雜なる神經中樞を有するものに高等の精神を宿すと云ふは的確なる證據なりとす。

是れに依て之を觀れば意識過程の神經作用に伴ふ所以を知るべし、更に知力の腦體中に存在する理由を考ふるに、第一知力多き者は腦髓の重量多く且つ廻轉多し、第二腦髓の發育不完全なるものは知力の發達不完全なり。

右事情に徵し考ふるも、精神卽ち心性作用は腦中に存在して、神經系統と密接の關係を有するものたる事は明かなり、今左に腦髓の重量及び發育廻轉

の解剖的諸見を加へて讀者の參考の供せんとす。

大腦の容積は小腦に比すれば遙かに大なり大抵八と一との如し此大小兩腦を合すれば重さ大抵三磅あり然ども婦人の者は概して男子の者より一乃至三瓩輕きものとす「マルシャン」氏の檢定に由れば男子四〇〇、〇瓦十五才乃至五十才)二十才以上に至りては著しき重量を增加せず女子三七、五瓦(十五才乃至五十才)十八九才より著しき增加なきものなりと云ふ。

腦は發生の初め單純なる膜囊なり其發育するや甚だ速かにして頭蓋腔壁の發育は却て遙にか遲延す故に腦胞は壘んで腔內に於て襞狀に突出せざるを得ず之れ卽ち腦廻轉の生する所以にして此廻轉も初めは唯僅かに廻

轉間溝も甚だ淺し之を第一期廻轉間溝と云ふ是れより漸々廻轉間溝は增加し益々深陷して終生不易の間溝となる是れを第二期廻轉間溝と云ふ第一期廻轉間溝中腦の外面を斜めに外下方に走る一溝は殊に深し歳の幼長を問はず必ず目擊せらるゝものなり是を名けて中心溝と云ふ廻轉間溝の間には即ち隆起あり所謂腦廻轉是なり「ガル」氏は此の各廻轉をして腦髓の機關と見做し其一部分の發育を指して人の特性と爲し秩序性破壞性攝成性等の如き複雜なる作用を有する機關に分てども如此は心理上不合理にして未だ妥當の見なりと云ふを得ざるに似たり。

第八章　情感

身心の密接なる關係を存すること此の如し、今一歩を進めて情感發動の理を概說すれば更に能く其關係を明にすることを得ん、凡そ情感の發動するや其種類によりて異なりたる現象を生ずるものとす、即ち喜怒、憂懼、愛憎、皆な各々異なりたる外貌擧動を示現するものにして、喜ぶ時は人皆な笑ひ、哀む時は人皆な泣くの類是れなり而して情感の示現に二種の別あり〔一〕擧動の上に示す者は面貌の變化にして喜怒其の過程に從ひて眼瞼の運動、鼻孔開閉、兩唇緊緩其他筋肉の伸縮呼吸音聲の變動を生じ全身の變態を現ず

るが如く情緒を示現するものなり(二)機關の上に及ぼすものを擧ぐれば喜怒哀樂の情より影響を內臟及分秘機、排泄機等に及ぼし或は其作用を促し或は之を妨止するが如く即ち消化器、生殖器、涙腺の分秘、皮膚の發汗、心臟の季動等情緒の異なるに從ひて其變動を呈す如斯情感の發動するを以て見るも實に身心の關係密接にして決して單獨に發動し變換するものに有らざるを知るべし。

第九章　心性起原說

前段說論する處は要するに心性は神經系統中に存すると云ふに過ぎずして未だ體中如何にして存し如何なる理由に由りて其作用の生ずるかは知る能はざれども、爰に暫く唯物論者の心性起原說に從ひ無機の轉して有機となり、無機元素の化して神經組織を作り進んで心性作用を生するに至るの一斑を窺はんと欲す。

抑も天地の初めに當ては地球も一の無機界なりしならんとは學者の考證する處なり、無機界より漸く轉して有機體を搆成するに至り、次て動植二物を生じ、動物は次第に進化して其中最高なる今日の人類を生したるものに外ならず、而して動物の神經に感覺運動作用を有するものは、之を組織する元素の抱合及其の全體の搆造複雜なるに由るべし、蓋し搆造複雜なれば從て

複雜の心性作用を呈するものにして、人類の腦髓及神經纖維の關係は一層複雜微妙なるを以て心性作用の現象も他の動物に比して更に奇なりと云はざるべからず而して動物の神經より發する作用は反射即ち自動作用に止れども、人類の神經より發する作用は、意織即ち所謂心性作用にして其差違頗る大なり、一般動物の神經機能に在ても、其種族の異なるに隨つて神經組織に單複の別あると同時に感覺の上にも亦た大差あり、されば一層高等にして複雜微妙を極めたる人類の神經機能に至りては、微小の刺戟も忽ち感受し、其の反射作用の流轉變化して意織即心性作用を發現するものとす之れ人類特得の享性なりと云ふべし。

第十章　物心兩界

更に物心兩界に就て少しく述ぶるの要あり、此宇宙間に於て吾人の眼目に映寫する森羅萬象は之を物即ち物質と稱し、之に反して千狀萬態の思念閃目の間に生ずるを覺ふ、之を心即ち心性と稱す、又客觀主觀の語を以て之を分つ、客觀とは物界又は外界と稱し、主觀とは心界又は內界と稱す。

凡そ物質には大小。厚薄。硬軟の別あるを以て之を識別すること容易なりと雖も、心性には感官を以て測度し得べき形容なきが故に其實態を知る甚だ難し、然れども物を識別し又考案するは心の作用に依らずんば能はざる所

にして、心若し存せざれば物亦た其存在を示すこと能はず、之れと同時に物存せざれば心亦た其の作用を現はすこと能はず、物心兩者は互に相待ちて初めて其現象を示し其作用を呈するを得るものなり、之を喩ふるに鏡面の花の如し、鏡面の現象たる花は鏡面と相合して始めて其影を成すものにして、花は即ち物界の物に比すべく、鏡は即ち內界の心に比すべし、而して心には心體と心象との別あり、心體は心の實體にして心象は心の現象なり、鏡面の花は所謂心象にして鏡面は則ち心體なり、蓋し象あるは體ある所以にして、鏡體あるにあらざれは焉ぞ能く花の現象を見るを得ん、心體あるにあらざれば焉ぞ能く心面の現象を生せん、是を以て吾人の現に知る所の者は

鏡に映する花たる心象に過ぎずして、鏡其物たる心體は得て知る能はずと雖も、既に花の映ずるあるを知らば心象の外に心體あるを推知するに難からざるなり、何ぞ又疑を狹むを要せんや。

第十一章　心象論

心性の現象即ち心象は意織の作用にして單一なり、其の現象を分つて情感。意志。智力の三種とす、此の三元素は意識を搆成する根本にして、一切の心性現象は皆此の三元素の種々なる作用に外ならざるなり。

蓋し智は情と全く異なり、情は又意と全く異なりて、三元素互に其性態を別

にせり、則智は事物の辨別を爲し、情は苦樂の感を有し、意は發動的の作用を爲す、然れども爰に注意すべきは、智情意の三能力は所謂能力論者の說の如く、互に孤立して働くものに非らずして、常に互に相關聯するものたり、智の働く時は必ず多少の情と意と之に加はり、又情の動く所必ず多少の智と意と之を助け、意の發する所必ず多少の智と情と之に副ふを實驗し、偏へに智(又は情又は意)のみの働きと云ふが如き現象なきものなり、夫れ此の如く智を離れて情なく、情を離れて意なく、意を離れて智なし、故に若し此の三者を或る一に集合せしむる時は平均能力に倍せしむることを得へし、之を井上圓了氏は經濟的利用法(哲學館講義錄妖怪學第十七號)と云ふ、則ち此

利用法によりて甲をして乙に倍するの力を有せしむる事を得るなり、例之ば(甲)をして其智力を要するときに當り、情意二者の力の半を減して智の上に加ふる時は、其從來有せる百なる力は忽ち二百の力を有するに至るべし、而して(乙)の智を要するときに當りて、矢張り百の力のみを用ふる時は、甲は乙に倍する作用を呈するに至るべし、若し又情を要する時に當り(甲)は智意二力の一半を減じ乙情の上に加へ(乙)は依然として同量の割合を持續する時は、是又甲をして乙に倍する力を示さしむることを得るなり、意の場合も亦之に準して知るべし、今左の圖によりて甲の智乃乙に倍する例を示すべし。

若し甲をして情力及び意力を倍せしむる時は左の如くなるべし。

此利用法による時は、通常心力の少量を有する愚者も智者に倍する力を示すことを得るなり、例之ば甲は二百四十の心力を存し乙は三百の心力を有すと定めて、其比較を示す時は左の如し。

即ち甲は乙より愚なるを知る、然れども若し甲をして融通運轉の利用法を行はしめ、乙をして其利用法を行はしめざる時は甲をして乙に倍するの智者となさしむべし其圖左の如し。

其他之に準して甲の情及び意をして各乙に倍せしむることを得るなり、此

の一方の力を減じて他方に加ふる利用法は、心理學上にては心理集合の作用に本くものにして、精神の全力をして其要する所の部分に集合せしむるもの是なり、蓋し人の學力に富み世才に長ずるものを見るに、必ずしも其生來の力常人に倍蓰するにあらずして、此の力を集合したる度の强きに依るもの多し、然れども若し其集合一方に偏倚して他方に運用せらるゝなき時は、或は一二專門の事業に於ては之が爲めに益することなきに非らずと雖も、普通一般之に由りて偏僻人若くは頑固人となるを免れざるなり。

世の所謂英雄豪傑は、此集合力をして克く其場合に應用適中せしむるに長じたるものと云ふべし、故に心力を集合し時宜に應じて運轉適用するに努

めば、英雄たる亦難きにあらざらんか、然れども其所謂集合力とは則ち注意力を謂ふものなれば、其注意を隨意に一點より他點に移動するを爲さずして、之を一點に固着し、其點にある觀念が思想の中心となりて精神全部を支配する如きあらば、忽ち精神作用に變態を來して、遂に狂人の狀態に陷るに至るは又見易き道理なり。

心理學上智力を區別して知覺。記憶。想像。觀念。斷定。推理とし、情感を區別して感情。情緒となし、意志を區別して注意。願望。反省——及外部の運動を司どる執意とす。

心性作用は極めて複雜多樣なれ共窮極すれば唯一の意織なり、之を通常精

神狀態又第一自我と云ふ、精神は神經中樞の機能にして即ち大腦の灰白質部は其動機點なり、是を以て完備せる神經組織に適當なる血循を得れば、心性作用に關係ある神經細胞並に纖維の微分子活動して、物質的(ポテンシヤル)の勢力(エネルギー)より一種無形的(カイネチツク)の勢力(エネルギー)に變するなり、故に神經機能に變化を生すれば之を感覺に及ぼし、從て神經を感動する時は其心をも動かすものにして日常吾人の經驗する所とす、彼の喜怒に因て顏貌言語に變狀を來し、疾病に因て精神に不快を感ずる等皆心身相關するを知るべきなり。

精神作用の厚薄は注意力の强弱と周圍の事情とに因て分るゝものにして、今假に有力なる機能を現出せんと欲せば、或事柄に注意すれば循環機能之れが影響を受け、動脈血の循環を腦髓の或る一部に灌流し、其部の神經細胞と神經纖維とは特に活動を開始すると同時に、他部の機能は一時休止の狀態となり、其勢力一所に集注するを要す、之に反し一時に多樣の事項に注意せんとするときは、多くの循血を要し隨つて其勢力も廣く腦髓の多方面に消費せらるゝは勿論なりとす。

第十二章　心性論

心性則ち心體は、實に幽玄にして聲もなく形もなく隨て時なく處なしと雖も、一朝動機を得て發現せんか、躍如として聲あるが如く又形あるが如し豈

靈妙ならずや。

夫れ物體は一見自動するが如くなるも、其實自動するに非らずして、他の力に依りて始めて運動するものなり、見よ上は日月星辰より下は金石草木の類に至るまで、一として他力の影響を蒙らざるはなし、即ち各種の引力に依るに非らざれば他體の受たる運動を傳承するに過ぎざるなり、之に反して心性作用は悉く自動的にして、自ら記憶し自ら思考し自ら活動するのみならず、未然未知を類推して事理に合せんとす、即ち未だ實見したる事なき遠地の風景を想像して腦中に描き、或は古英雄を追懷して其人の性格風采を髣髴たらしめ、或は無窮無涯の天體を窮めて星宿の運行を測知し、宇宙の萬

象を捕へて厚生利用の具に供ずるなどは言ふに及ばず、或は又聾者も克く聲あるを識り、盲者も克く色あるを察するが如き、皆な是れ吾人人類の心力の靈妙不思議の作用に由るにあらずんば能はず、彼の音響の被膜を衝動し、光線の網膜を刺戟する如きは、要するに一種の機械的作用に過ぎずして、固より玄妙の機動と同一視すべき者に非ざるなり。

然り而して心性は實に一種靈妙不思議の力を備ふ、之を感應と云ふ、蓋し心機の活動は猶ほ電氣の物体に於けるが如く、感すれは應し、動けば變ず、其現象甚だ奇なるを以て世人徒に不思議と爲し、之を一種の妖怪に數るの外未だ進んで其眞理を窮むるなかりしが、今や科學の進歩は長く之を妖界有

觸れの現象として藐視せず、漸く其の眞相を表明するに至れるなり。

第十三章　感應論

茲に至て余輩は漸く本論に入るの機會に到達したり、抑も感應とは心力作用の波動に由りて起る者にして、此力は相互の間に意思を通し、相感し相語るのみならず、廣く天地萬物に感通し得るものなりとす、凡て意思は或目的物に向て注がれ、其の極點に到着して始めて其の働きを現すものにして、恰も光力の燒點に燃燒を起すが如く、又音波の中心點に反響を生ずるが如く、心力の波動も亦た目的點以外の人物には、假令他より如何に妨遮せんことを試むと雖も、更に何等の影響を蒙るとなし、其狀猶ほ無線電話の相間隔する地位にありても彼我反響すると同一理ならんか、無線電話は一の發動機を備へ、之に向て發音すれば、忽ち他の一方の受動機に反響して、感受し得る裝置を備ふるものにして、發信機と受信機とは該機械重要の部分に屬するが如く、此心性の感應に於ても亦施感と受感の二作用は一大樞機たり。施感は自動的にして自己の意思を他のものに感受せしめんとする心力なり、即ち物質的の神經中樞機發動して精神作用（心力）なる一種無形の勢力に轉化するに際し、神經分子は極微の顫動を起して其の波動を空間に傳播せんとするや、猶ほ光線の「エーセル」波動に由る如く、一種の傳導分子に由りて

目的點に波及到達するなり、又受感は他動的にして、傳導分子より波及し來る他の心力を感受して反應を現發す、人に於ては腦髓の要部に之を感得するなり。

斯の如く相傳へ相感する機能を心通又感通と云ひ其の結果を感應と云ふ、而して感應の有無及び多少は施感力の强弱に比例するものにして、施感者の意思確固たれば感應從て著しく、之に反して其意思微弱なれば感應亦微弱にして時としては全く効力なきことあり、而して施感者の意思の强弱とは、其の目的を達せんとし、又は達し得べしと信ずる所の信仰心又は願望心の强弱を指すものにして、若し施感者にして熱心なる信仰又は願望を起し、心力を其一點に專注せしむれば、震天動地の活動を實現せしむる强ち難しといふべからず、彼の行雲を止め、猛獸を制し、旱天に雨を降らしたる等の奇說は古記に於て常に見る所、現に修驗者輩の奇怪なる現象を衆人に示して、神通力を有すと稱し愚民を眩惑し、或は降神術、鎭魂術、火渡術、震動術、幻術、忍術、止動術其他諸種の加持、祈禱、呪咀、巫女、御嶽講、天理敎、日蓮宗の輩が、信者を昏睡に陷らしめ、種々の囈語を發せしめて神異を誇るあれども、是れ皆な其の本源は此心力感應術を行ふに外ならずして、敢て奇怪不思議として異むに足らざるなり。

心力の感應は獨り吾人人類のみならず、他の有情物非情物にも總て及ぼし

得べし、而して此の感應術を善用したる者は古來其人に乏しからざるも、就中其著名なるは釋迦、基督、弘法大師、阿部清明、役の行者等にして彼等が卓絶の智識非凡の德性を有し、能く此の法を應用して奇蹟を擧げ偉勳を奏したるは、余輩其荒誕ならざるを知る、蓋し有情物中吾人々類は、特に此感應の性質を有するを以て、吾人の日常談話し、交際し、敎育し、說諭命令すること等凡て此の感應法に依らざるなし、此法の應用に巧みなるもの乃能く人をして感動せしむるは、余輩の每々見る所にして、例之ば能辨家の演說に於ける、名優の演劇に於けるが如し、之を催眠學上暗示(Suggestion)と稱す、此語は元來羅典語の(Suggiehl)即ち歸伏せしむる、告げ知らせると云ふ意より來たりたるものにして、單に暗示と譯するは未だ充分其意義を表はし得たりといふべからず、然に「ミユンステルベルヒ」氏の定義は甚だ感應法に適當なるが如く思はる、即ち氏は反對の觀念を生することを妨碍する觀念にして吾人日常の生活を支配する原則なりと斷定し而して曰く兒童を敎育するも、醫師の患者を治療するも、風俗も習慣も流行も、善行爲も、惡行爲も、技術も政治も、將た宗敎的生活も皆な此の「サグエッション」なくんば行はるべきものに非らず、所謂觀念聯想の法則も此の一部に過ぎずと、之に依つて見れば氏は頗る廣義に取れるが如く以て暗示の意義を窺ふを得べし。

而して觀念聯想と云ふことは、吾人の腦中に一つの觀念を喚起する時は、聯

想の法則に由りて忽ち他の觀念を惹起するをいふ、假令ば坊主と云ふ觀念の起る時は忽ち寺を想起し、寺の觀念は轉して又墓の觀念を惹起するにあらずや、又人の床中に呻吟する聲を聞く時は、座中の人悉く憂欝に沈むが如きは、情感より起る聯想觀念ならずや、或は喜びを聞て笑ひ、哀を聞いて泣き、美味の談を聞て口中唾を催す等、皆な觀念聯想より喚起するものなりとす。

此の如く觀念は直接に腦髓の反射運動に因て起るものにして、意志の作用には依らざるもの〻如し、蓋し他人の動作を見聞して已も亦た其動作に倣はんとするものあり、例せば一人が音頭を取り萬歳を唱ふる時は群集一齊に異に同音唱和するが如き是なり、故に感應法は社會的に及す影響と、個人的に蒙る影響とを問はず、精神現象を支配する所の一大原則なりと云ふも敢て過言には非らざるなり、此の原則は實に教育上及び感化上絶大なる關係を有するものにして、一鄕に一人の道德家あれば其鄕の風俗頓に敦きを見るが如き世間其類例に乏しからず、孔子、釋迦、基督の感化は更にも言はず、中江藤樹翁は近江聖人の名ある人なり、而して其一鄕は今日に至る迄猶ほ其德を欽慕して已まざるにあらずや、遠江國には二ノ宮尊德翁の遺志を繼ぎて報德社と稱し岡田翁の名高く之れに加盟するもの年々著しく增加し勤倫貯蓄と公德を唱導し感化せられるが如く、實に人物感化の力の强大な

る、千百載の下玲瓏として其人猶活けるが如きを見る、之に反して悪方面より考ふるも、花柳社會博奕者流の良風俗を破傷するが如き皆是れ心性感應の徴證ならざるはなし。

又人の精神に豫期することは感應して往々適中するものなり、例之ば中風を豫期せる者が偶々中風に罹り親の死亡忌日には己も死すべしと爲し、或は四十二歳の厄年とか或は方角の悪しき方面に移轉したるが故に何か災難あるべしと爲す等、其心中弱氣を起したる時は一身一家に早晩不幸災難の生ずるが如し又代々主人の短命續くは當該主人自己も家人も他人も皆な其夭死を豫期するに由りて果して早死するものなり。

斯くの如く精神作用は日常吾人の意料以外に奇妙の働きを爲すものなり、是を以て此狀態を科學的に利用するは、是れ原生の道たらずんばあらず、即ち催眠的感應法のある所以にして、此法術は人をして催眠狀態に居らしめ、感應法を施し日常狀態の現象をして一層顯著ならしむるものなり、左に之を論ずべし。

催眠的感應法とは、人工的に睡眠せしめ精神作用の全く休止して無我無意の境にあるに乘じ、施感者の思想を言語若しくは動作に表はして、受感者に命令し感應せしむるに在り、則ち暗示 Suggestion 是れなり、茲には「シーディス」氏の定義に從ひ解釋するを妥當なりと信ず即ち氏は、人の多少反抗あるに

も不拘或る觀念の精神中に亂入するを意味し其の觀念は遂に是も非もなく其人の精神を支配し且つ顧慮なく殆んど自動的に現實せらるゝなり」と、されば催眠したる者に此感應法を行へば、催眠者は術者の意の如く種々の命令に依つて動作し、見るものをして奇異の想を爲さしむ、此の奇異なる現象に就て「ブルボー」氏は、輙く信せずして全く感者が其容態を伴るものと云ひ、「ベルンハイム」「ヒチー」兩氏は之に反對して、被術者たる感者は術後新人格を有するに至る者として賞賛し、殊に「ベルンハイム」氏は催眠術を凡て命令(暗示)の効果として激賞したり。

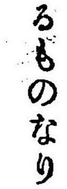
第十四章　睡眠論

心力の交通感傳する現象を顯著ならしめんとするには、人工催眠を起し、第二自我即ち補意識を發現せしむるを要す、此理を研究せんとするには先づ睡眠の原理を知らざるべからず、故に此章には普通睡眠の起る理由及び其効用を說明し、次で催眠感應術に及ばんとす。

意識は常に連續して現出するものに非らずして、多少規則的に間歇するものなり、而して其間歇の狀態を催眠と名つく、睡眠に就ての研究は未だ詳かならざるも、凡そ事物は一定の時間に使用する時は又一定の時間に休息せ、

ざるべからざるを常とす、人身も勞すること一定の時間に達すれば必ず疲勞を覺ゆ、此の疲勞を回復せんには一定に休息をなし其間に營養を取らざる可らず、是れ猶器械の摩損せる部分に修繕を加ふるが如し、若し然らずして幹軀四肢を常役せば全躰の衰弱を來すは勿論にして、殊に胃腸の如き一日三回食物を送るに限れるに、然も間斷なく食を貪りて其消化作用を勞せしむる時は、必ず其部に疾病を起すは的面なり、但し心臓肺臓に至りては、晝夜間斷なく動作するものにして、若し之を休息せば忽ち吾人の生命を失ふべければ、他の機關の如く一定時の動作をなし、一定時の休息をなすものにはあらざれども、一刻一秒の間に或は働き或は休み以て少分づゝの休息を取り、肺臓は一晝夜間に平均八時間、心臓は六時間内外の休息を取る割合なり、是に由りて之を觀れば吾人人間は、一晝夜に六乃至八時間の休息を要することゝ明白なり、然らば吾人精神の最高機關たる腦髓も、亦六七時間の安眠を要するや亦言を須たず、是れ腦髓は晝間斷へず勞役し、夜間に於て一定時の休息即ち睡眠をなす所以なり。

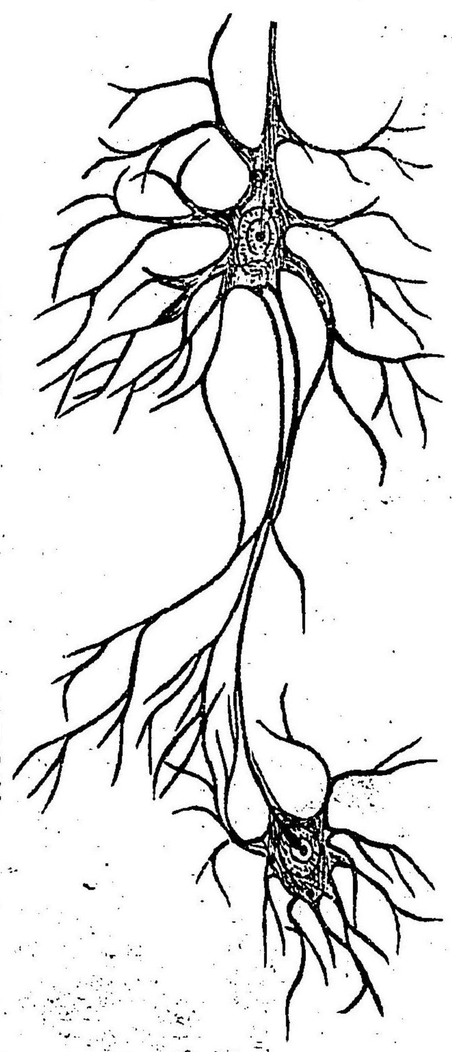
蓋し睡眠の起るは腦髓に循環する血液大に減少して一定の腦貧血を生し、爲めに腦髓の活動作用減衰するに由るなれども、元と睡眠は意識作用の休止する時に起るものなれば、隨て腦中血行緩漫となり、次で其減少となる道理にして、二者は共に或るは原因となり、或は結果となりて互に前後表裏の

關係を有す、又一說には睡眠は腦髓の細胞活動に由りて生したる副產物、則ち乳酸の蓄積したる中毒に由りて生ずるものなりと云ふ、或人は腦細胞の活動する時には多極細胞 の突起は擴張して微動し睡眠時には收縮  して止動するものなりと云へり。

「下の圖解」

「ノエログリア」は柔軟同質にして神經纖維と神經細胞の間に在りて之を糾合するの用を爲す「ノエログリア」には亦細胞あり其形ち種種にして多數の分枝突起を有す又核有り之を「グリア」細胞 Glia Zellen と云ふ、發生上中樞神經系統と其原を同ふするものなり故に又中樞細胞と稱するものあり。

中樞細胞（グリア）



活動の狀

止動の狀

睡眠の原因は之を視神經床と、中心腦室灰白との內壁に存する細胞の官

能癈止に歸すべきが如し、醒覺は一に此等の細胞の正規なる官能を營む
に由るものにして、若し此等の細胞の官能を營爲するに必要なる刺戟の
缺くるに至るか、或は其細胞が刺戟に應じて作用し能はざるに至る時は
其動物は睡眠に陷るなり。(神經學雜誌第二卷第一號)

此外臨時睡眠を生ずる原因數多あり、第一身體を過度に使役し疲勞したる
時、第二身體の或る一部を刺戟し之に注意を引く時、例之ば視神經を刺戟し
睡眠を催するが如し、第三食後は一般に睡眠を催ふす、此は消化作用を營爲
する爲め血液は胃腸に向て流注し腦中の血量を減少するに由る、第四温浴
を爲し飲酒後は皮膚の血管神經に一時痳痺を生じ血管擴張し充血を誘引す
るが爲め、腦中血壓を減ずるに由る、然れども若し氣温高くして熱力强きと
きは、神經を刺戟して眠を妨ぐるが故に適度の時にのみ眠を催すなり、之に
反して寒冷は睡眠を妨くるものなれ共、極めて强壯の人にありては少しの
寒氣は之を妨ることなく却て之を助く、其他病弱老耄の人は時を定めず睡
眠を催ふすものなり。

睡眠は亦大に外部の事情に助成せらるゝものなり(一)外界の靜閑なるは精
神作用を休息せしむ、然し閑靜に過ぎんより幾分か小音微響のある方却て
眠を催ふすことあり、例へば深夜に潺湲たる溪聲若しくは狺々たる狗吠を
聞き、或は雨滴の點々たる、茶鐺の沸々たるを耳にする如きこれなり(二)暗

黑なり、然れども枕頭燈光の明滅たるは却て睡眠を助く〔三〕運動は極めて徐々に且つ適度に之を與ふるときは能く之を助くるものなり、平路坦々たる所を人車に乘りて走るが如きこれなり〔四〕無諏味蠟を嚙むが如き書を讀むか又は左程注意を引かざるものを讀む場合には眠を催す〔五〕音曲詩歌等にして其音底抑揚に一定の規律ありて、秩然たる調節をなすものは皆な催眠の力あり。

其他注意豫期習慣聯想等に由りては或は眠り或は醒むる事多し、吾人が前以て眠らんことを豫期する時は幾分か早く睡眠を催ふす効あり、又平常時を定めて眠れる人にありては習慣となり、其一定時に至れば必ず之を催ふすに至るなり、或は毎朝擊柝又は鐘聲にて醒起するの習慣あるときは、此の音聲に觸れざれば決して醒めざることあり、或は時計の音につれて眠れる時は該時計を撤して室外に出すに從ひ直ちに覺醒することあり、此の如きは皆な習慣の影響なりとす、爰に又奇なることは、例へば一定の約束に由り翌朝何時頃には起きんと期し、又早朝瀛車に投せんとして其時刻を心中に刻するときは必ず其の時限に起き、又然らざるも他人より少しく促さるゝときは直ちに醒むるものなり、或は通常人に喚び醒さるゝも己の最も畏敬する人に呼はるゝときは一言直ちに起上ること、彼の兒童の嚴父に於ける、僕婢の主人に於ける塲合の如きあり、或は己が最も愛し最も注意する者の

聲には速かに醒起すること、彼の母親が愛子の泣聲に於ける、消防夫の警鐘に於けるが如きあり、其他自己の姓名を呼ばれて忽ち醒覺するが如き、是れ皆な吾人が注意豫期の結果にあらざるはなし、蓋し吾人の精神は睡眠せる際と雖も、常に心意の或る方に向ひ之れが作用を準備せるもの〻如し、故に一旦豫期の到着せるときは直ちに醒覺するものなり、又心中平安なるときは熟眠し之に反して危惧不安なれば眠らんとして眠る能はざることは何人も實驗する所なり、彼の重罪人の如きも未だ死罪とも赦免とも決せざる間は、此事毎に念頭に懸りて熟眠を得ざれども、既に赦免と決すれば云ふに及ばず、處刑と定まりたる場合にても到底免る〻こと能はざるものと斷念するが故に安眠を得るに至ると云ふ。

睡眠に就かんとするときは、眼瞼は重く垂れ、手足は遲鈍を覺へ、視覺は休み、味覺去り、夫より覺嗅觸覺の順序を追て睡眠の境に入るものなり、又醒起の際は全く上の序次に反し第一觸覺第二聽覺第三嗅覺第四味覺第五視覺の次第を追ふて復舊す、故に醒覺せしめんとするには觸覺を以て輕く刺戟するを便とす。

睡眠中に於ける身體內部の狀態は、呼吸及運動共に遲緩となりて其力を減し、血行も從て遲鈍となり躰溫を低減ならしむるが故に、寒冷を感ずること醒時より甚たしく、分泌物の量も亦た減少す、然るに消化機能は睡眠中に減

少せずして却て增加するものにして、其理由は腦作用休息して其血行を胃腸に送り消化作用を助くるに由る、又脊髓及び反射機能は多少其の作用を減ずるも、全く之を休止することなし、更に進て睡眠中に於ける精神の狀態を考究するに、腦中意識の外來刺衝を感ずること能はざるより、感覺作用を休止するは畢竟意識の休息に由るものこせざるべからず。

第十五章　生理的催眠術

催眠術とは人爲的に人を催眠せしむる方法を云ふ、而して之に生理的催眠術と心理的催眠術との二法あり、生理的催眠術は呼吸即ち氣息を數ふる、こ、或はイロハを唱誦反復し、或は思を神佛に留めて唱名せしむるが如きこれなり、或は又眼を一點に注きて動かさゞるが如き、或は心を足の指端に集めて其一點に注意するが如きも其方法の一なり、此等の方法は素より人々により種々の工夫ありて、各被術者に特効あるものなれば此に一定し難しこ雖も、普通一物體を眼前に保持し之を注視せしめて視神經を刺戟し、腦の細胞を疲勞せしむること十五分乃至三十分間なる時は漸く睡眠を催ふし來りて遂に就眠す、之を第一度の催眠こ云ふ、此時兩眼を開き電燈の如き强き燭光を眼前に輝かし以て網膜を刺戟すれば、狀態忽ち一變して身躰强硬こなり、術者の與へたる位置に保持せらるゝに至る、之れを第二度の催眠こ云

ふ、此時顱頂を強く壓迫すれば更に深き眠りに移り、其狀態殆んど醒覺者の如くなる、之を第三度の催眠即ち睡遊と云ふなり、「キユルペ」氏は被術者が此狀態となるに至るは、意識が其官能を復活して種々の動作を爲し、而して其の思想と行爲とは全く術者の意の如くなるものなりと云へり。

以上は生理的催眠術に由りて起る現象なれども、或る場合に於ては前の如く腦細胞の疲勞を來す程の時間も費さずして催眠せしめ、或は被術者の身體に接近することなく間を隔てゝ催眠せしめ、或は又遠隔せる場所よりして催眠せしめ、又醒覺せしむる等あり、此等は最早生理的即ち人工催眠術と云ふを得ずして心力の感應作用に由る者と云はざるべからず、而して其の研究は全く心理學の範圍内に屬するものたり故に心理的催眠術を技術的に研究せんとせば、勢ひ生理的催眠術を補助として行はざるを得ず、近時世間にて心理的催眠術と稱するものは其の實心生混合法の催眠術に外ならず、余輩が今爰に論述せんとするところも同じく心生混合的催眠術の方式なれ

ども、茲には姑く心理的催眠術と云はんこす、此法を行ふには場所の靜騷及施術ども生理的法式の如く固より擇ぶ所なしと雖も、是は全く熟練の功を積みたる後に於てすべきものにして初學者に於ては可及的注意せざるべからざるものあり依て左に實驗したる所を記述せん。

第十六章　心理的催眠術

心理的催眠術の方法は極めて單純にして、只た一言眠れと命令するか、又眠らしめんこする意思を示すに在るのみなれども施術者の眠れと云ふ言こ被術者即ち感受者の眠るこ云ふ意思こ相合ふ所は則ち一種の心理的連鎖を生じたるものにして極めて大切の事たり、若し受感者にして意思を有せざるか或は全く反對の意思を有する時は催眠し難き者こす、故に該連鎖を生せしむるは催眠施感上第一の要件こす、次きに催眠的現象の性質は補意識の發現に外ならず、之を發現せんこするには左の條件を要す。

〔甲〕施行者は專心一意感受者を睡眠せしめんこに熱注するを要す

〔乙〕感受者の異なるこ其事情の相違せるこに由り施術者に於ては專心一意なるも催眠に難易深淺の差あるものこす、「シーディス」氏は催眠的現象の大網を擧げて左の五條件こせり。

〔1〕注意の專注　「ブレート」は視覺を一物に專注せしめ「ナンシー」派は二指

〔2〕印象の單調　を目前に注目せしめ且つ暗示を用ゆ
一物を凝視せしむるか又は同一同調の音樂を聽視各官に取らしめ其一事に思想を專注せしむ

〔3〕有意的動作の制限　受感者は他の動作を可及的自ら制抑するに努むる事

〔4〕意識界の制限　意識上の觀念は復雜ならず單調なることを要す

〔5〕禁止作用　意志を用ゐて有意的動作を制し或る觀念の横出せんとするを抑壓するを努むる事

以上五ヶ條は心理事情の大要なり、然れども術者の不熟練なるか若しくは其受感者に對する信用の薄きものは前に示したる命令のみにて就眠せしむる能はず、故に生理的催眠術を補助として其の睡眠を誘起せしめざるべからず、先づ其準備として左の要項を撰擇すべし。

催眠術式

〔一〕極めて閑靜安穩にして且つ温暖なる室内を擇む事

〔二〕位置は安樂椅子若しくは寢臺の上とし仰臥せしむるを可とす、但し被術者をして適意なる靜安の位置を取らしむれば、必ずしも寢臺を用ゆるを要せざる事

〔三〕術者は愼重の態度を保ち、被術者をして疑懼心を抱かしむるが如き動作を謹み、徐々に施術に取掛るべし

〔四〕被術者をして篤く術者を信ぜしめ且つ催眠術の安全無害なるものた

ることを十分信ぜしむるを要す

〔五〕被術者の威權術者より高き時は往々催眠し難きことあり、是れ術者に於て心中憚る所あるが故なれば術者は何人に對しても施術に當つて意思を高尚にし確く己を持せんことを要す

〔六〕催眠誘起には朦朧たる光線幽微なる音樂馥郁たる花香等を用ゆ

〔七〕施術は晝間こし食後は一時間の後こす

〔八〕精神激動せる者、意思の不定若しくは効力を疑ふもの又は之を否定する者は催眠困難とす

〔九〕六十歳以上は催眠困難中に置けども實際容易なる者あり

施術法は始め先づ生理的方法に依る、即ち簪又は緒締に附屬する瑪瑙珠の如き、赤色にして光輝あるものを用ひて、被術者の眼上四五寸の處に保持し、之を疑視せしむること十分乃至二十分時間なる時は先づ眼の瞳孔散大して白膜に充血を呈し次で涙液を漏らすや眼光朦朧となり睡氣を催し、遂に自ら眼瞼を閉鎖せんとするに至る、術者は此機を察して凝視體を取除き眼を閉さしめると同時に、靜かにお眠りなさいと命令し、次て顏面及上肢を上部より末端に至るまで輕く摩擦すること數回、尚ほ深き眠りに移さんとするには、更に克くお眠りなさいと命令し前の如く摩擦するなり、如斯すること數回なる時は隨意の狀態に催眠せしむることを得。

〔注意〕お眠りなさいと命令するには、心理上緊要欠くべからざるものにて是れ則ち心理的催眠法の秘術なり、之れ術者と被術者の間に一種の關係を生じ、之れに依りて眠らすも醒すも動かすも自由自在なり、之れを心理的連鎖と云ふ後章に詳說すべし。

又現今は言語上の暗示を用ひて催眠せしむる法多く用ひらるゝ、即ち豫め被術者に催眠せしむべきことを告げ然る後徐ろに

私が今に君を睡眠させてあげる—其れゆへ君は忽ち睡くなります—最早君は眠むくなつてきた—君の顏色は其の事を表明して居る—君の眼は將さに閉ぢんとして居る—君の眼は愈々鈍くなつた—果して君は眼を閉ぢて仕舞ッた—君は最早眼を開くことは出來ないでありません—君は手も足も動すことが出來ないでありましょう—君は既に眠りに入りました

等なり勿論此の暗示を與ふる時、被術者中には反抗せんとして故らに其眼を開くあり、其時は幾遍も繰り返して嚴肅に「君

の眼は將さに閉ぢんとす」と言ひ聞かすなり、斯の如く（心理的に）暗示を與ふる時と同く生理的刺戟を併用するを容易とす其方法は視覺なり味覺なり聽覺なり觸覺なり嗅覺なり其何れを取り、如何樣にするも、術者の擇ふ所に由りて差支なきものなり、譬へば

〔一〕被術者を仰臥せしめ術者は其上方に在りて自己の眼に注視せしむ

〔二〕術者は被術者の右側若くは左側に在りて一手は被術者の手掌ち則催眠帶と稱する所を握手し他の一手は前額部に輕く安置し特に拇指を眉間に當て之れを上眼にて凝視せしむ

〔三〕二個の鏡を以て被術者に對し反對の方面に廻轉し之を凝視せしむ

〔四〕單調の音樂に意を集注せしむ

〔五〕被術者をして或る一事に專念せしめ突然大聲を發して驚愕せしむると同時に、眠れと命令して身體を前の如く摩擦す

〔六〕術者は一手を被術者の頂部に置き、一手を頭上に觸て徐々に頭部を右方より廻轉し始めは緩徐に央ば激に廻し而して最後には叙々緩徐に復して止む其廻數凡そ二三十回に及び眠れと命令する時は直ちに就眠す

其凡例右の如くなれども、此等の方法は何れを擇ぶも大差なく、又數法を同時に試むるも害なし、其は百聞は一見に如かずの諺の如く、若し一度之れに

熟練する人の施術を實見せば容易に解得して實踐するを得べし。

此術を「メスメルズム」と稱する者あるは「メスメル」氏が動物電氣說を唱へて此術に依り患者を治療し名を得たるを以てなり氏は半生にして維也納を去り巴里に移住し、一千七百七十九年には二十七ヶ條の論文を世に公にして、當時巴里の醫學界より非常に批難を招きたるにも不拘、多數の患者は爭ふて氏の下に蟻集し、到底一人にて悉皆施術し難きより、爰に「バケー」法といふを案出し三十人の患者を同時に施術することゝせり、此の「バケー」は櫈の木材にて造りたる圓形の框にして、高さ一尺の處に安置し之を廣き一室に備へ、其の框の底には鐵粉と硝子粉とを散布し、且つ多くの瓶を置き、框に

は水を盛り、蓋には多數の孔を明け、此の孔より多の鐵條を出し、之れを患者に握らす、而して患者の位置は二列若くは數列に座せしめ、相互に膝を交へて密接すること殆んど乘合馬車中の混雜の如くす、斯くて別室に於て單調の音樂を奏する時は、室内の患者は忽ち心神恍惚として一種異狀の感覺を生ず、此機を見て「メスメル」は頗る嚴肅なる態度を取りつゝ鐵棒を携へ來りて此室に入り、輕く患者を打つて廻り患者をして催眠狀態に陷らしめたりと云ふ、然も「メスメル」の行ひたる右の裝置は治病上何の効あるに非らざれども、斯くして「メスメル」を崇敬せしめ、患者の信念を强固ならしむる一手段に過ぎざりし也、後世之に類似したる事を行ひ愚民の歸依を得たるも

の少なからず、現に我國に於ても近頃濱口某が眞言秘密の法と稱して、奇異なる顯術を行ひ患者を治療したりと傳へらるゝも蓋し此の亞流に似て非なるものなるべし。

第十七章　醒覺法

醒覺法は單に命令にて醒めよと告ぐるのみ、但し餘り急激に醒覺せしむる時は、醒後頭痛又は不快を感ぜしむるを以て徐ろに行ふべし、譬へば君は最早眼を醒すべき時となりたり、今より五分の後余が一二三と呼ぶに依り其の三を合圖に眼を開きて醒むべしと云ふが如し、又今より三分の後余が枕を一ッ打つときは君の眼は忽ち醒むべしと云ふが如き、同く暗示の法に依り醒覺せしむるなり、而して醒覺せしむるものは初め催眠せしめたる人ならざるべからず、若し然らざるに於ては啻に其効なきのみならず、爲めに受感者をして苦痛を感ぜしむるものとす、是れ則ち術者と被術者との間に一種特異（ラッポー）の關係を有する所以なり。

第十八章　催眠の難易

催眠術を感ずる者は古來神經病者殊に「ヒステリー」患者に限る者の如く思はれたるも強ち然らず、却て健康者にして精神の確實なる男子に行ひ易し、

而して催眠を善感するものは、男女共に十才以上二十才前後にて十才以下の小兒と六十才以上の老人は困難なり、又「ヒステリー」患者及び神經病者不眠症者に對しては、施術に熟練せざる限りは容易に受感せしむる能はず、殊に白痴者と七才未滿の小兒は意識の作用具備せざる爲め全く催眠を感せず、蓋し催眠の難易は氣候風土も亦關係すると見る、暖國の人と寒國の人とを比較すれば暖國人の方が施術容易にして、印度人の如きは尤も善く受感すと云ふ、「シャコー」等の古説にては催眠術に感ずるものは病的狀態の人に限るとしたるも、今日「ベルンハイム」「デルボー」等の説によれば何人にても受感せざる者なく、余輩亦た之を實驗して明に之を證せり。

騷物音、食後、精神激動、寒室、過暖、烈光、空氣温潤、酒精、珈琲、茶、等は凡て妨げとなるものなり。

第十九章　催眠狀態

前章に於て普通睡眠の理由を論述したれば、此章に於ては人工的催眠の狀態及び其現象を説くべし、催眠狀態は催眠の方法と、其の場合と、感受者の性質及び事情に由りて其狀態を異にす、故に其の分類法も二樣に分つあり、六樣とするあり又九樣に分つ者ありて、斯學者の所見は各人同一ならず、余輩の施術方法を以て行ふ時は先づ始めは淺眠の狀態にして身體に倦怠を感

し、睡氣を催し眼瞼を閉鎖するも聽覺を存し、周圍の微響も聞知し得て知覺は未だ著しき變狀を來さず精神は恍惚として所謂半睡半覺の狀態となる、此期に於て言語的の暗示を與ふれば漸く熟睡の狀態に移り、睡息を發して開口し身體軟緩狀となり、四肢は前位置より垂下するも復位せんとするの力なし、此時四肢稍や硬狀となりて漸次深眠に移らんとするも尙ほ暗示及び施感者の行爲は僅に知覺し得、是れより更に深眠に移るものにして、之を强硬狀態、昏睡狀態、遊睡狀態の三種に區別せんとす(「シャコー」の分類に從ふ者なり)然れ共、此の狀態は每常何人にも必ず同一に來るものと云ふべからず、或る被術者は强硬となり、或る被術者は昏睡となり、或は昏睡より强硬となり、又移りて睡遊となり、或は二者の混合狀態を現ずるものなり。

(一)强硬狀態は蠟細工の肖像の如く不動の姿勢を取り、眼瞼開張し、眼睛一處に止定して動かず、涙液積滯して溢出し呼吸作用沈靜す、此時其の手腕を不適當なる位置に移し、其の儘放置するも安泰の位置に復位せんとすることを爲さず、長く其の與へられたる位置に保持す、其の甚だしきは全身棍棒の如く硬直となり、其の筋肉は石の如く凝固して人力を以て輙く屈曲すべからざるに至る、世間往々斯の如き狀態を利用して種々の娛樂的玩弄に供する者あるは人道に戻り惡むべき所行といふべし、譬へば頭部と踵部を二ツの椅子に架して其の中體を橋板となし、其の腹部に重量を置くか、或は此

上に座して依然其重きに堪ゆるを試みて笑ふが如し、畢竟此狀態に陷りたる者は反射運動を爲さず、筋肉神經は刺戟を受くるも短縮せず、皮膚は刺戟に遇ふも知覺を有せざるを以てなり、然れ共筋肉の感覺及び視覺聽覺は僅かに其活動を保持するを以て凡て暗示の影響を受け種々の現象を生するものなり、殊に此時を洞察期と云ひ、內部の意識が著しく活動する時なるを以て幻覺、禁止、書察、治病診斷、繼續的暗示を感受し、又止痛暗示を與ふれば外科的大小手術を行ふに毫も苦痛を感ずることなし、之に次て神明期に移る時は過去、現在、未來、禍福、吉凶等を洞察す、之れ通常の意識狀態にては脫することゝ能はざる時間と空間の束縛を離れて、獨り意志の活動を縱にす

るを得るに由るなり。

强硬狀態を生ぜしむるには普通人にあつては或る物體を凝視せしむるか、又比私的利患者に對しては不意に强き音響又は光線を向けて刺戟するか、或は又昏睡狀態にある者の眼瞼を開き、不意に光線を放つて視神經を刺戟すれば强硬となるべし、强硬狀態を回復せしむるには、暗示を用ゆるか面部を吹き其陰部を壓する等の輕き刺戟にて足る、又之れを昏睡狀態に移すには、開張せる眼瞼を閉鎖するか、或は光線の度を減ずる時は忽ち變移するものなり。

此狀態にありては、凡ての感官は其の知覺性を失して、激烈なる刺戟を蒙む

合に於ては聽覺の著しく鋭敏となることあり。

又殊に奇なる狀態を現すは、半身は强硬狀態を保ち乍ら半身は昏睡狀態に在ることなり、元來此昏睡狀態は自然睡眠としても極睡の時期にて夢をも見ざる時なれば精神活動は殆んど全く休止せる時なり、然れども猶幾分かは獨り聽覺を保持して單純なる暗示を受くれば起立し或は幻覺を生ずることあり。

〔三〕睡遊狀態は或る物體を凝視するか、或は通常の催眠方法を用ひて生ぜしむるなれ共、又昏睡狀態若くは强硬狀態より此の狀態に移すことを得るものなり、其方法は手を以て頭部を輕く壓迫するか、若くは摩擦するか、又は蹠趾の關節部（催眠帶）を輕く摩擦する時は此の狀態に轉移するものなり。

此の狀態の特性は、强硬狀態に於けると同じく、皮膚又は粘液膜を刺戟するも更に痛感を惹き起さぬものなり、併し他の感官は著しく鋭敏となりて輕微の刺戟も知覺するなり、眼瞼は閉つることあり或は半開することあるも瞬目せず、兩眼瞼を壓する時は昏睡となり、又一方の眼瞼を壓する時は半身昏睡となる、從て該徴候は其感覺となり他の半身は睡遊狀態の官感を呈するものなり。

凡て官感は鋭敏となるものなれ共時としては甚だ遲鈍となることあり、溫

るも痛感を生ずることなし、例へば耳の傍にて大聲を發するも毫も感せず、視線は或一點に注き居るが如くなるも視覺を有せず、故に瞬きすることもなく、舌上に刺戟物を置くも知覺することなし、又被術者の精神作用は悉く術者の意思の如く動き、順從にして抵抗することなく毫も獨立の人格を有せず、全く機械的動作に等しき行爲を演ずるものなり。

(二) 昏眠狀態は睡眠の極期にして眼は閉鎖し、或は半開し、眼瞼は微かに震動し、顏貌は更に變狀を呈せず、身體は無力の狀となり、頭部は多く仰向し、手腕は垂弛して之を抵擧するも直ちに垂下して力なし、筋肉神經は著しく過敏性となり僅微の刺戟も忽ち短縮動作を爲し、刺戟去る後も依然として運動を持續す、如斯凡ての反射運動亢進するを以て、時に不測の禍を生ずる事あり。

昏睡狀態を生せしむるには或る物體を凝視し、或は眼瞼の上部より眼球を適宜に壓迫すれば多く此の狀態を生ずるなり、又强硬より昏睡狀態に移すには眼瞼を閉鎖せしむべし。

此狀態に在りては聽覺の外凡ての感覺機關は大概其知覺を失ふものにして、凡ての動作は甚だ不活潑不確實となる、故に傳話管を耳に宛て知覺せしむる時は稍や應ずるものなり、又起立を命ずれば暫くの間躊躇したる後ち漸くにして立ち、命令暗示には應ずるも活潑明瞭なること能はず、然し或る場

合に於ては聽覺の著しく鋭敏となることあり。

又殊に奇なる狀態を現すは、半身は强硬狀態を保ち乍ら半身は昏睡狀態に在ることなり、元來此昏睡狀態は自然睡眠としても極睡の時期にて夢をも見ざる時なれば精神活動は殆んど全く休止せる時なり、然れども猶幾分かは獨り聽覺を保持して單純なる暗示を受くれば起立し或は幻覺を生ずることあり。

(三) 睡遊狀態は或る物體を凝視するか、或は通常の催眠方法を用ひて生ぜしむるなれ共、又昏睡狀態若くは强硬狀態より此の狀態に移すことを得るものなり、其方法は手を以て頭部を輕く壓迫するか、若くは摩擦するか、又は蹠趾の關節部(催眠帶)を輕く摩擦する時は此の狀態に轉移するものなり。

此の狀態の特性は、强硬狀態に於けると同じく、皮膚又は粘液膜を刺戟するも更に痛感を惹き起さぬものなり、併し他の感官は著しく鋭敏となりて輕微の刺戟も知覺するなり、眼瞼は閉つることあり或は半開することあるも瞬目せず、兩眼瞼を壓する時は昏睡となり、又一方の眼瞼を壓する時は半身昏睡となる、從て該徴候は其感覺となり他の半身は睡遊狀態の官感を呈するものなり。

凡て官感は鋭敏となるものなれ共時としては甚だ遲鈍となることあり、溫

覺及び觸覺は通例著しく過敏となるものなり、故に視覺を要せず歩行し又能く身邊の物品を判斷するを得るなり、又聽覺も著しく鋭敏となり通常の十四倍强となる故に、一髪の觸る所も明らかに知覺す其他壓覺、温覺、嗅覺及び視覺も皆な著しく鋭敏となるものなり。

睡遊狀態に在ては、最も特異の催眠的現象を呈するものにして、記臆力は感覺と同しく鋭敏となり種々の現象を實現するを見る、而して此の狀態中に行ひたる行爲は、醒覺すれば忽ち忘失して毫も記臆に存せざるを常とすれども、再び催眠すれば能く前の行爲を回想するものなり、之れに由りて考ふれば催眠には催眠系統の連絡ありて醒覺時期の生活狀態と全く獨立せるが如く思はる。

催眠的睡遊者の記臆力は甚しく鋭敏となるを以て其働く所人をして神怪不思議の感を懷かしむることあり「リセー」「ヒネー」等佛國一派の學者の主張する所に依れば、吾人には主意識と補意識と二樣の統一的意識ありて、通常狀態乃第一自我は主意識に由りて統一せられ、睡遊狀態の第二自我は補意識に由りて統一せらる、而して兩者の意識は或る點までは相獨立して互に關係を有せざるなり、故に補意識即ち催眠狀態の支配の下に經驗したる事情は、主意識即ち通常狀態に於ては之を記臆に存することなしと云ひ又米國の心理學者「シーディス」氏は、二重乃至多重人格の存在を唱へ、之を意

識の分裂として説明するものゝ如し、此説に反對するものは「ウント」「ゼームス」「ミユンステルベルヒ」「ナヒヘン」等の有力なる學者の一派なり、余輩は爰に其説の是非を論ずる遑を有せずと雖も之に依つて前述の催眠的現象の因て起る理由を再言すれば、吾人には二種の自我を存ずることを知る、第一自我は通常の精神狀態に於て現實的に活動するものにして、第二自我は催眠狀態に於て活動するものなり、故に吾人通常の狀態に在ては、第二自我は通常的意識の下に潛在して活動を現さゞるに依り、敢て其の存在を知ることを能はずと雖も一旦催眠狀態に變ずる時は全然表裏して第二自我を現出すると共に第一自我は頓に其活動を停止するに至る、而も自我の現出は啻に

催眠狀態の時に限らず普通の場合に起こる左の現象も亦た第二自我の現出といふべし。

一夢想夢癲夢中逍遙　（變換性自我）

一幻覺狂、迷走狂其他の癲狂　（發狂性忘想）

一藥劑的魔醉の狀態

一狐狸禽獸族の據憑狂等なり　（憑據　）

抑も睡遊者には自動的と受動的の二種あり、受動的睡遊者とは問を受くる時は僅に低聲にて答を爲し、己に對し談話せられたる言語を記憶し、且つ自己の位置人格等を識認すれ共自動的に行動すること能はず、然るに自動的

睡遊者に至ては自ら動作し自ら談話し得るものにして椅子に倚る時は之を離れて左右を顧み、座にある人に對しては通常の談話、日常の挨拶を爲し得るなり、故に此の睡遊者は通常人と殆んど異なることなく、只だ過度の心的激動を見るのみとす、蓋し睡遊者の精神的活動は、著しく鋭敏となり、種々の質問に答へ、又能く暗示により左右せらるゝことは前述の如くなるも、如何なる點まで暗示の影響を蒙むるものなるやは殆んど知ること能はず其行動は屢々意表に出で、人をして驚嘆せしむることあり、而して是れ皆「ラッポー」の關係より生ずる結果にして、之を左に詳說せん。

第二十章　アンラッポー　en, rapprt

前章論するが如く、普通睡眠と人工的催眠とは、其狀態に於て既に著しき相違あるのみならず、催眠狀態に於ても亦た種々異なりたる行動を爲す所以は畢竟術者と被術者の間に生ずる、一種の心理的連鎖なる「アンラッポー」に原かざるを得ず此「ラッポー」の强弱は命令現象に差異を及ぼすと云ひ、或は又全く關係なしと云ふの二說あれども、之を通常睡眠者に試み命令行はれずして、人工睡眠者は即ち該關係の現象を生するを以て考ふれば、余輩は甲說に依て命令現象に感及するものと言はざるを得ず、之を心理學上の引力

的關係と云ふ也、此奇異の現象は心理的命令を以て術者の手で、親しく受感者の頭部を壓する時に生し、單に生理的即ち物體を以て頭部を壓するか、若しくは身體を摩擦する時は少しも此の關係を生せざるなり、又施術者に於て口吹するも此關係を生する者なり、如斯して既に此の關係を生する時は、術者の命令に從ひ行動し、又或る場合に於ては恰も連鎖を以て術者に結續せられ居るが如き看を呈す。

然れども此「ラッポー」を生するには各人同一ならず「ラッポー」にして愈々強ければ命令に從ふこと倍々從順なり、之れに反して微弱なれば多少の反抗ありて命令十全なる能はず、又強き「ラッポー」を有する時、術者が其室内を去ることあれば睡遊者は不安不快の狀を示し、甚しきに至りては術者の行く處に隨行して其傍らに在らざれば安息せざるものあり、此時他人が如何に大聲にて之れを抑止せんとするも、更に聽覺せずして平然たるのみならず、強て之に干渉せんとする時は甚しき不快を感ず、又月日を期して再眠せしむることを得るものにして、此の場合には施術者と感受者と相隔ること哩餘にありて相見ることなきも、術者に於て被術者に對し催眠の施意を點する時は、既に其れのみにて催眠狀態を呈せしむることを得、豈又奇ならずや、殊に最も奇なるは毫も視覺に依らず觸覺のみを以て其の術者たることを識別することなり、其中鋭敏なる感者は單に衣服の上より觸るゝも猶は

能く施術者其人たることを識別するものなり、余輩は催眠狀態の場合のみならず通常の場合に於ても彼の弊斯的里患者に就ては屢々此關係の著大なるものあるを實驗せり今左に其の二例を示さんとす。

（一例）

年齡二十二歲某妻妊娠五箇月

昨年生後一年の愛兒を腦水腫の爲に失ひ非常に悲哀せしことあり、幼より中等の生活に成長し、身體は脂肪に富みて蒼白色を呈す、性質は温順にして、忍耐と自節の精神强きを以て自ら抑制を加ふるも、常に幣斯埃利症を有し而も未だ著しからざりしが妊娠三ヶ月に相當する頃實姉肺患に罹りたりとのことを聞き、憂苦の餘り俄然痙攣を發し、次て昏睡狀態を呈し十二日間止動的となりて時々痙攣を發し、傍人をして見るに忍びざらしめ甚苦惱の狀を呈したれば、百方醫治を加へたるも寸効なく、或る干涉的治術に對しては却て苦痛を感ずるが如き看ありし、然るに一朝昏睡より醒覺するや全く平常の精神狀態に回復し、前日の病苦は毫も記憶せず、爾來十日乃至數日にして發病するも一三日にして醒覺する等、其病態を繰返して二ヶ月餘を經過するも治せず、依て出養生の爲め某地の旅舍に止宿中、病初原因たる實姉危篤に瀕したりとの事を聞くや、再び强度の痙攣を發して前の如く昏睡に陷りたり、昏睡中は時々痙攣强直狀を呈し食慾

視聽味等の感覺は全く中絶し、僅かに嚥下作用を營むのみ、然るに觸覺は著しく鋭敏となり、夫某に就ては其指尖の觸るゝのみにても他人と識別し得、又夫の手を握り居る時は安靜なるも、若し他人假令ば其父母兄弟の代て其の手を握れば、之を排して夫某の近接して在らんことを希望するに似たり、余は該旅宿に於て初めて同女を診察したるが當時患者は右側臥の位置を取り膝を屈し、不整頓の姿勢に在りて止動狀を爲し、夫某の手を握りて動かず、言語をも發せず、呼び起すも聽覺なく、眼瞼閉鎖して微振し、皮表に觸るれば不快の狀を呈し、少量の水は嚥下し得るも先づ久しく口腔に止め居るもの〻如し、脈膊呼吸に異動を呈せず、大小便通には感

覺ありて、非常なる困難の中にも便所に行くに在らされば排便を爲さず、其旅宿の隣室は其時四五十名の酒客ありて歌舞音曲の聲喧擾を極めたるも、患者には少しも感覺せざりしもの〻如し、余は夫某の手を排して診察に着手せしに、患者は少しく身體を自動的に動かし、次で眼瞼を開き眼球を上竄して牙間緊急を起し、次で全身痙攣を發したり、之に依つて自發的に昏睡狀態と、强硬狀態とを兼發せるものなりと診察し、初めに亞的兒を嗅入せしめて痙攣を鎭め、次て安母兒亞水を嗅入せしめて咳嗽刺戟を起さしめ、更に亞的兒を嚥下せしめたるに漸く身體を自動するを認めたり、依て耳邊に口を寄せ、其病氣の全治することを强く命令して再三之を試

み、且つ明朝に至れば貴婦は心地能く醒覺するを得べしと、約束的の命令を下して歸院したり、然るに患者は一日を隔て、三里餘の里程を數名の人に介せられて余が病院に來り、自ら進んで感應術を施さんことを希望せり、依つて即日一回施術するや著しく爽快となり、爾來又發病することなく十數日の後ち退院したり

（二例）

二十五歳某妻曾て妊娠したることなし

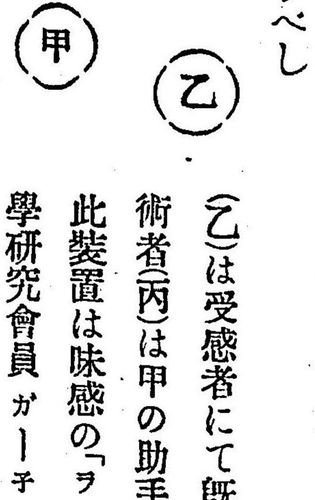
幼にして父母を失ひ祖母の手に成長し、中等資産を有し身體は瘦形の方なり、著明の疾患を得たることなしと雖も、常に薄弱にして精神機能快活ならず爲に從順なれども世才に鈍く、他人に瞞着せられて金錢を詐取せられたることあり、或は何氣なく證判等を爲し、後日夫の大困難を釀したることあり、今回又出入の職人に欺かれて證判したるを悔み、全然健忘狀態と變して、眼目を見開きたるまゝなる顏は呆然痴者の如し、實に自己が自己なるや否やも辨別すること能はず、何人が談話を試むるも之に應答する所を知らず、獨り夫某の言語を識別し、其命令に應ずることあるも擧措確實ならず、常に夫の傍に在らされば安息せず、又夫が何れに行かんとするも必ず隨行す、故に其の夫は二十三日間晝夜同衾して患婦を慰めたる後ち醒覺せしめたるを見たり

右二例の如きは特に引力的關係の著明なることを證するに足るべし。

又「ラッポー」の關係の顯著なるを知らんと欲せば、左の試驗の結果を參照すべし

(乙)は受感者にて既に催眠狀態に在る者なり(甲)は施感者即ち術者(丙)は甲の助手

此裝置は味感の「ラッポー」を試驗するものにして、英國の心理學研究會員ガーチー氏及ドクトル、メーエルス氏の現に目擊して同會へ報告したる所なり、其法は初め甲乙丙の三人各數歩宛を隔て、圖に示したる如く位置に就き、然る後甲は丙より



食塩を請取り無言にて之を味いたるに、此時乙は鹹い々々叫びて頻りに舌打し、又甲が砂糖を嘗めたる時は、乙は少し甘い前きのやうに不味くはないといふ、次で薑粉を嘗めたるに乙は非常に辛くて芥子の樣な味がすると云ひ、甲再ひ砂糖を嘗めたるに、稍や甘い甘いと答へたり、其他のものを用ゐて試驗したるに、其結果は同樣にて、最後に於て甲は酢を用ゐたるに乙は既に極睡眠に入りて復た答を爲さゞりしといふ

「ラッポー」は此の如く一見奇異に思はるれども、吾人は日常の場合に於て之に似寄りたる事柄を屢々實驗するものにて、或意味よりいへば、社會的秩序は之が爲に保たるゝものなり、其場合を示さば左の如し。

一他人に特殊の同情を有する者のラッポー
一何の意味なく好親する者のラッポー
一夫婦間親子間の親愛より生するラッポー
一男女互に期せずして顔を見合せ所謂初戀のラッポー
一反對に何の意味なく相衝突するラッポー
一其他普通睡眠論の章に擧けたる注意、豫期、習慣、聯想等によりて或は眠り、或は醒むる等の事情も一種のラッポーに歸すべし

第二十一章　推心感應法（命令又は暗示）

Suggestion, 又 inspieationskunst

前章に於て反復論述したる如く、催眠術に依て催眠狀態に入りたる人は、日常の精神作用全く休止し、自已なく他界なく、生死苦樂の念なく無想無我の境に逍遙して、其靜なる事大湖の如く、其明なること八面透徹の鏡に異ならず、是れ心性（第二自我或は靈魂）本來の眞相なり、此の境に在りては毫も抵抗性なく絶對的從順にして、時間空間の制限を受けず、單に動機の妙力を備ふるのみ、故に若し他の心力來りて衝動刺戟せんか、忽ち感觸して其命に從ひ動作を現すものなり、則ち推心感應法の行はるゝ正に此時に於てせらる、此狀態に於て命令すれば是も非もなく、偏に旋感者の意志に從ひて行動し、

所謂「シーディス」氏の定義を下したる如く設へ其人に多少反抗の念ありとするも、一旦或る他の觀念の其精神中に侵入する時は其の觀念は直ちに其人の全精神を支配するものなりとの理論が實現せらるゝ也、而して此法を行ふときは、眼前實在せざるものも實在するが如く感者をして思惟せしめ、又平常信せざることをも感者をして確信せしめ、又教育的感化法を以て未だ矯正し能はざるものを悔悛せしめ、醫藥を以て治する能はざる病人を立ちどころに恢復せしむる等は易々の業たり、例之ば術者は被術者に對して、汝の前に大なる黑犬ありと命令する時は、感者は眞に其の犬を見、又汝は今戰場に在りと命令する時は砲烟彈雨の活劇を即座に見るが如し、又命令に由て人格を變ずることも容易にして青年とも、老人とも、農夫とも、俳優とも、僧侶とも、軍人とも爲さしむることを得るのみならず、馬とも、猫とも、狐とも、又幽靈とも、化物とも爲さしむる事を得るなり、又健康者を病人と爲し、無口者を多辯家と爲し、多辯家を無口者と爲し、吶と爲し、暗啞と爲し學者を無筆者と爲し、無筆者を學者と爲すは勿論、勇敢、怯懦、の變換も自在也、尙ほ一層奇怪なるは曾て其地を蹈みたる事なき遠地の風景、若しくは隔絶し居る父母兄弟姉妹知友の安否をも實見し得、又支那の內地なり、西伯利亞の鐵道旅行なり歐米漫遊なり、坐乍ら驗し得ることなり、未開人が神怪不思議として、此現象に對し過多の崇敬を拂ひたるもの偶然にあらず。

此現象を稱して命令的幻想と云ひ、通常睡眠中に生する夢想と齊しきものなれども、醒覺後は全く記憶せざるを常とす、然れども醒覺後尙ほ能く記憶すべきことを豫め命令し置くときは、能く睡眠中のことを記憶し行動するものにして、又之が實行の日を期し置くときは・醒覺後三日の後にても・十日の後にても、一年の後にても其期日至れば確實に其命令を實行するものなり。

推心感應法は被術者の腦中に或る觀念を亂入せしむるものなれば、言語若しくは文章を以て命令し又觸覺に依りて之を行ふ、例之ば女子に布と針とを持たしむる時は裁縫を爲し、又腕を組ましめ首を傾くる時は悲哀の情を

現はすが如し、術者にして此命令を爲さんとする時は左の注意を要す

一確實にして明瞭なる言語を用ゐる事

二單純にして正確なる文章を用ゐるも可なる事

三醒覺後繼續して記憶すべきを命令す

四斷定的に命令する事

五論理的に命令する事

蓋し心性は素と無垢の體なれば、點塵も互に反影して藏くすことなし、故に曖昧なる言語を以て命令する時は、感應亦た曖昧にして全然不結果に終ることあり、苟も術者を以て任ずる者は、先づ自己の意志を確乎たらしめ命令

を下すに當ては熟心懇切にして嚴肅なるを要す。

今右の睡遊狀態中に於て施術上の用語例を擧ぐれば概略左の如し。

用例

一、朝寢を矯正するには……汝は自今毎朝六時には起る……其の以上は寢ては居ぬ

二、寢小便を治するには……汝は今夜から小便が出たくなると目が開いて便所へ行く樣になつた……寢て居てすることはなくなつた

三、手足の不自由ある者には……汝の手足は自由に運爲樣になつた……屈伸自在である

四、便秘の癖ある者には……汝は毎朝起きると大便に往き程よき通じがある樣になつた……決して便秘して腹の心地あしきことはなくなつた

五、神經痛の患者には……汝の痛み所は悉く忘れたやうに治つた、もう痛みはなくなつた

六、咳嗽を鎭むるには……汝の咳嗽は全く治つた……もう決して、せきをすることはない

七、記憶力を良くするには……汝は勉强して物覺へが宜くなつた……決して忘れることはない

八、遠方の安否を尋ねるには……汝は今より大坂に行き某店の主人は何を

して居るか見て來い……と命令すれば、被術者答へて曰く、今東京某商會へ振出し切手を送達中で店頭には三人の商人客ありて噺中であります

九、來訪者の素性を洞知するには……今朝米國人「ゼントルマンサギシ」と記したる名刺を出して面會を申込みたる客は何者なるか調べて見よと命令すれば、被術者答へて彼れは「シカゴ」で牢を破り三日前に横濱へ來た者であります

十、交際場裏の事情を探知するには……今紅葉館の宴會に出席中の人數は何名なるか某侯爵と何博士は居らざるか能く見て來れと命令すれば、被術者答へて今席上に在る人は八十六名侯爵は演說して居る所です某博士と某伯爵は煙草を喫んで居ます

十一、汝は明日十二時の時計を三ツ聞くと自分の姓名を忘れる（事實忘るゝあり）

十二、汝は今夜一時の時計を打つと起て公園の池を三回廻りて歸寢す（實際命の如くす）

其他用例を擧ぐれば際限なきを以て煩を省く、術者は宜しく時と場合に臨んで必要なる命令を下すべし、然れども實際應用上百發百中して正確ならんことを欲せば、術者は屢々實踐習熟せざるべからざるは勿論、被術者も亦

た催眠術の經驗を重ねたるものに非らざれば確定なる能はず、之を要するに疾病を治療し惡性を矯正するは、意識作用に依つて神經作用を喚起し茲に改善を全ふし得るに在りとするも、人事上に關する不可思議の効果は、意志の力が人體を離れ、空間エーテル運波に依りて縱横自在の働きを爲すものと云はざるべからず、彼の靈魂說を主張する一派の如きは此自在力を認識するが故なり。

第二十二章　感應療法

感應療法（Suggestions Fiheropie）は患者をして自己の病氣は此療法に依りて必ず治癒するものなりとの信念を、充分抱かしむるを第一要件とす、而して此の信念が患者の腦中に確乎と印象する時は、感覺機關に影響を及ぼし、從て病所の神經組織に變化を生して疾病を退治するなり、是れ身心兩者の關係上生する現象にして此現象は前章に於て論せし如く、吾人の身體に變動起れば心性に異狀を來し、心性に異狀を來せば感覺機關に影響を及ぼすの理に由るは勿論なりとす。

抑も感應法に依る治療術は强ち催眠狀態に在る時に限らず、普通醫治の上にも常に行はるゝものにして其實例を示せば醫師が臨床治療上多くの場合に於て、氣安め的投劑と稱し、毒にも藥にもならざる藥劑を與へて自然に病

の治するを待つことあり、之を醫學上自然良能又は對期療法と云ふ、然れども患者及び家人等の側より見れば醫師の投劑は必ず治病の効驗あるものなりと云ふ觀念が其頭腦中に印象せらるゝを以て乃ち感應の妙力に由りて自然に治癒の効を奏するに外ならず、而して醫の巧拙の如きは、實に此の妙能の應用如何に在りと云ふも不可なかるべし、殊に幣斯垤里患者に對し、鎭痛藥又は睡眠藥と稱して單に蒸溜水を注射し、若しくは少量の葛粉を頓服せしめ奇効を奏するあるは醫家の敢て珍ともせざる所とす、彼の天理教會の輩か迷信家に與ふる神水なるものも畢竟此の感應力を利用して欺騙を逞ふするにありと知るべし、然れ共人には亦た疑心あるを以て一面には積極的信仰心を生ずれども、一旦他面より猜疑の念起りて其崇信を打消さんとするある時は忽ち感應力微弱となるか又全く其の現象を呈せざるに至るもの多きは吾人の平常目擊する所ならずや。

之に反して催眠狀態に在ては心性の反抗毫髮も無きを以て疑心の生ずるなく、感應力增大して鋭敏となり、容易に著明なる現象を起さしむるを得、今催眠狀態に於ける推心感應療法の主治を擧くれば左の如し。

（一）官能的諸病

（イ）神經痛、頭痛、胃痛、疝痛、偏麻質斯性疼痛

（ロ）不眠症、幣斯垤里性官能障害、自發的睡遊、魔夢、神經性食慾缺乏、妊

娠惡阻、慢性酒精中毒、慢性謨兒比尼中毒、ニコチン中毒、コカイン中毒、神經性呼吸困難、常習便秘

（八）神經性痒感、癲癇、耳鳴、皮膚の痙痒疹

神經衰弱症、幣私垤里、比卜混垤里、不眠症、吃吶、耳鳴症は催眠甚だ困難なるものなるが故に、其効果を奏すること難きことあり、又た輕度發狂、時發狂等は感應すること雖も催眠頗る困難あるなり、殊に意識の全く忘失したる者は全然無効なり。

〔二〕振顫麻痺　顔面神經麻痺、知覺異狀局所麻痺、痙攣麻痺、半身不髓、脊髓勞

右の諸症を全癒するは困難なるも、輕症は再發を防禦し、又數回之を施す時は電氣療法に勝る數等なり

〔三〕血行器病

神經性心機元進、心臟狹搾痛

〔四〕呼吸器病

麻痺性嗄聲、喘息、痙咳、咳嗽

〔五〕泌尿生殖器病

遺尿、遺精、淋病、月經痛、月經不順、印巢痛、子宮附屬器の攣痛、窒痙攣

〔六〕眼科的病

眼球壓迫痛、結膜の急慢炎性「トラホーム」の炎症刺戟强き時又外科的手術を行ふに當り催眠せしむれば頗る簡易安全にして其結果良好なり

〔七〕膿瘍、横痃壞疽の切開、痔瘻、痔核の手術其他大小手術に應用するを得べし

其他臨床上姑息的療法、若しくは對症療法と稱する種類の疾病に對しては、尙ほ多くの應用に適するならんと信ずるも茲には之を列擧する煩を避け、少くも一二回以上の施術に由りて實驗したるものを記するに止めたり而して左に十餘の治驗錄を示すべし

(1)男四十七歳　三月前より左座骨神經痛に罹り病狀次第に增劇して醫藥寸効なく患者は夜間、莫兒比涅注射に由り僅かに安息するも大小便の自由を欠き他人の介抱に依りて僅かに便するを得る有樣なれば感應法を乞ふ爲め人力車にて來院せり依て施術に掛る、恰も來院前一回の注射を施こされたることあれば忽ち睡眠せり、感應法を行ひ醒覺せしむるまで二十分時にして自ら歩行を試み毫も感痛なく夢の如しとて喜んで歸り行けり當日より注射を要せず、爾來隔日に一回施術す、三回目より八丁余を歩行し來りて施術を乞ふ、前後六回にして全癒し又施術を乞はず

(2) 女二十二歳　某院に入院すること五十余日毫も藥治の効なく、遂に幣斯垤里性幻覺迷想狂と、淋毒性腕關節炎とを發して衰弱の極に達せり、某院を去りたる數日後に「ヒステリ」症は輕快し稍本神に復したるも、下腹拘攣腕關節腫痛去らずして苦悶、呻吟、仰臥の位置に於て止動狀を呈す、依て感應法を行ひ、催眠中繃帶を脱して、拇指より示指と順次に屈伸することを命令するに、僅かに伸張することを得たり、更に腕關節及び全肢の屈伸上下運動を命令したるに、漸く之に應するを見たり、更に起座を命じたれば、暫く躊躇したる後ち兎も角も余が一手を添へたるのみにて起座したり、家人は奇異なる此現象に驚きて後害の一層大ならんを憂ふると、該術の神妙なることを見て茫然たり、余は其座位の儘にて醒覺法を施したるに、患者は醒めて左右を顧み、微笑を漏らして夢かと云へり、爾來三回にして自由に起臥するを得るに至れり

(3) 女三十八歳　四月前より左亞急性卵巣炎に罹り、二三醫師の治療を受けたるも効なく、下腹抱攣し引ひて左大腿内股に至り起座歩行甚だ困難なり、殊に夜間腰痛を來し安眠し難しとて余の院に投じ治を乞へり、左卵巣腫大して梨子狀大に腫張し、伸すれば疼痛甚だしく發熱あり、内服には緩下劑を投じ膣には阿片丁幾綿の「たんぽん」を施すも、晝夜一二回の莫爾比尼注射を行ふにあらざれば安息を得ず如此十數日を經過す

るも効なし、依て感應法を試みたるに一回にして充分感應し、即時疼痛止みて此日より注射を要せず、夜間安眠を得るに至る日々施術を請ふて止まず、前後七回にして腫張消散して又疼痛を訴へず退院したり

(4) 男二十一歳　海軍兵を志願したるも體格撿査四日前に至つて月餘前よりの痳病未だ治せず、膿漏疼痛あり面貌蒼白悄然として苦惱し、遂に撿査不合格に終らんを恐ると隣人來り其事情を述べて感應法を乞ふ、依つて施すこと二回にして疼痛去り膿漏大に減少し、撿査當日に至りて殆んど病苦を忘れたるが如くなりし

(5) 女二十歳　痳毒性子宮内膜炎に罹り膿狀白帶下あり、腰腹攣痛の爲め

困難すること三年に亘り曾て爽快の日なく各所の專門家に就て數月の治療を受けたるも治癒せずこと、乃ち感應法三回にして疼痛止むこと十數日間、然も猶ほ甚だしく子宮頸管に膿汁を釀す、依て藥液注射を施したるに再び劇痛を發し、次て更に月經痛を來し苦惱するに付き、又感應法を施すこと三四回に至りて全く疼痛止みたるが月經痛復び來るや否や次回の月經期に至らされば未だ知るべからず

(6) 女三十四歳　强劇の月經痛と平素子宮周圍の攣急症に困難するを以て、月經前三回感應療法を施したるに以來三回の月經期を經過するも暫時腰部に重感あるのみにて疼痛は全く忘れたるが如し

(7)男六十五歳(吃吶)　親愛なる富永兄の曾て二三回施術せる患者にして、其當時著しき効ありしに十數日の後再發したり、依て一回施術するや直ちに自由に發音するを得たり

(8)男子三名(神經性消化不良症)　神經性消化不良症は、十七八歳より廿一二歳の男子に發生するもの多きが如し、此年齢期の男子に發するものは實に頑固にして强度の羸瘦を來し、衰弱して精神に異狀を及ぼす時は殆んど狂者に近く、其極期に至りては死亡するものあり、余は如此患者三名男子に施術したるに二名丈は數回にして食慾盛に起り能く消化して遂に二三週の後全く治癒せしめたるが其内一名は今尚入院施術中なり該患者は十八歳にして他の醫院に入院し治療を受ること三ケ月餘を經過したるも毫も効なく、甚しく衰弱を成して盜汗あり、一見腸結核症の如く認められ且つ腹痛ありて日々數回の下痢を來す、依て數日の後ち病態不良なるものゝ診察し入院を拒絶したれ共、强て乞ふに由り一週間を限り許諾し、乳酸の内服を處し炭酸「クレオソート」を兼用せしめて試みに感應法を施したるに一回にして稍や食慾起り神心爽快を訴へ二回には下痢全く止まり粥を欲し能く消化するに至れり、然るに余事故ありて旅行の爲め五日間施術を行はざりしに、再ひ食慾を斷ちて一層衰弱を呈す、依て更に或日の如きは朝夕二回施術したるに、忽ち

空腹を感じ能く消化し自ら活氣を生し來たれり

(9) 男七十二歳　半年前中風を發し右半身不隨となり、且つ言語稍や澁滯す、然れども現に杖に依りて五六丁を歩行するに堪ゆる程度にありしが三日を隔て三回施術したりしに、全く治癒して杖を要せず常の如く自由なるに至れり

(10) 女五十六歳　一年前流行性腦脊髓膜炎に罹り、四肢に振顫痲痺を殘し殊に下半身は全く不隨症に陷りたり、依て入院を命じ即日第一回の施術を行ひ其の强硬狀態となるを見て起立を命令したるに、漸く之に應して自ら起立したり、然れども甚だしく振顫して顚到せん模樣あるに付き暫時にして復臥を命令し且つ指節の硬直を矯しめん爲め之が伸展を命じたるに僅かに屈伸するを得たり、依て當日は是れにて醒覺せしめ爾來隔日一回の施術をしたるに第八回目よりは辛ふじて便所に行くを得るの容態となりしが半ばより退院したれば全治迄施術する能はざりしも爾來追日快方に向ひ今は全く常の如くなりたり

(11) 男十七歳　右大腿の前面に手掌大を局して全く感覺痲痺し、且つ痳毒に感染し居たるが感覺痲痺は二回の施術にて全く治し痳毒は七回目にて全癒することを得たり

(12) 上膊痛及び肩胛關節腫張痛ある僂痲質私患者は數多きを以て一々列擧

せざるも單簡にして感應し易く奇効あり

(13) 遺尿症即ち寢小便の如きは大抵一回乃至二回にて根治するものなり

(14) 齒痛患者は大抵一回にて止痛し耳鳴は比較的困難なり

(15) 眼病には凡て著しき効あり粟粒性結膜炎、流行性結膜炎、夜盲等は一回乃至三回にて効あるを實驗し三回以上施術したることなし

(16) 助間神經痛、疝痛、扁頭痛、前額痛、後頭痛等の患者は催眠稍や困難なるも其何故なるやを知らず、從て治癒も速やかならざるもの多きを見る、然れども能く催眠狀態を呈する者は皆同一に奏効あり

但し三四回に至り患者の精神一定する時は必ず奏効あるものとす

(17) 外科手術に於ては十三歳の小女瘭疽を切開ずるに感應術を行ひ苦痛なく手術を終りたり爾來「カルボンケル」なり「フルンケル」なり横痘なり痔核なり痔瘻なり瘰癧なり刺傷なり凡ての手術に試みたるに甚だ好結果なるを感したり

以上記する所は余輩の日常行ひ能ふ所にして之を行ふには稍々強硬狀態に至るを見て施すを良とす通常神經痛、神經性消化不良患者、の如きは淺眠の狀態に於て既に能く感應するものなり、而して施感時間は短きは五分長きは二十分を出でず若し此以上に亘りて催眠せざる時は施術を癈するを例とすれども、尚熱心に施術を持續せば遂に催眠せしむるを得るものにて、現に

或癲狂者には二時間餘を費して催眠せしめたる例あることは、泰西斯學者の記述に於て見る所なり、余の此法を病者に應用する方針は、其何症たるを問はず有ゆる普通の治法を試みて効なき頑痼なる疾病に施すことゝせり、故に前記患者の如きは皆な此應用を受けたる人々なり。

第二十三章　迷信的現象の眞相

(1)日蓮行者の祈禱者には、一人の代任者と稱する者附添ひ居て信徒衆な大皷を打ち、打木(うちき)を敲き南無妙法蓮華經の題目を唱へて一念專注する內に右代任者は忽然昏倒痙攣を發し次て起座して喃々囈語を發するを見る、是れ一種の催眠術にして多くは睡遊狀態に發現したる者なり決して狐の乘移りにあらざるなり。

(2)呪詛の如きも其信念に依りて自己の意思を抑制し其間他意を狹まず、願望に全力を專注し目的に向て感應せしめんとするものなり、此場合に於ては目的の人の名刺にても寫眞にても當該人に感通作用を起すものなり、之れ自意の他感的應應法なり。

(3)巫女の口寄は他意の自感的感應なり、抑も巫女は元と賣奴として物品同樣に賣買せられたるものなれば、人間たる意識に乏しきのみならず、固より無教育にして普通の智識だになきを以て、毫も人事的社會的の觀念なく、常

時健忘的無我の境に生活す、故に容易に無心の人となり得るのみならず、幼時より強迫的に迷信的苦行を餘儀なくされたるを以て、僅微なる意識的刺戟を受くこと雖も、忽ち他人の意志を自感し感應發言するに至るなり。

(4)易者が他人の既往を語り現在を察し未來を判斷するも、其心念傾注して筮竹(自意の他感的感應)に感應するが故に、其過去は勿論、方に現れつゝある事及び將に來らんとする事柄の潛機が自ら之に冥合するに由る、故に易者が筮竹を取る際に呼吸をも爲さず一心不亂以て之に臨むは、全く其の無我無想を求むるにありて此瞬間は實に天地なく外他なく又自己ある無し。

(5)降神術は「スピリチズム」と稱し、歐洲にては死者の靈を喚起して之れと

交通するなりと云ひ、一時佛蘭西に流行し之れを職業とするものさるあり しと云ふ・日本に於ては古來神寄或は神降と稱し、奇怪なる現象を起して眞實神の乘り移りたるものとし、非常に敬信畏懼したるが、是れ歸する所は一種の迷信より起る他意の自感的感應なり、之を「ヒプノー」は意識の分裂作用なりと說明せり。

其他仙術とか忍術とか觀心術とか種々の法術世間に行はるれども、要するに感應的現象の部分的發現に外ならざるべし。

第二十四章　推心感應法興起の障碍

推心感應療法の今日我國に於て、漸く世人の注意を惹起するに至りたるこ同時に而も一方には之に反對するもの我醫學界幷に界外の學者間に少なからず、多くは學術の問題として研究する價値なしとして一笑に附し、恰も十八世紀の半に於て「メスメル」氏が、始めて斯術を神秘界より捕へ來りて、歐州の學者社會に提出したる當時と相似たり、何ぞ事を見るの甚だ輕卒にして、萬象を窮むるの極めて不親切なるや、然り而して此重要なる一問題をして益々輕視せしむる障碍は、彼の山師者流か之を奇貨として直に射利の用に供し、學說上の研究は措て問はざるのみならず、其懷を肥やすに急なるよりして甘言を以て愚夫愚婦を瞞着し、爲に治術の不成効は終に大害を遺すに至り折角の妙術も全く信用を失して斯道の大頓挫を來さしむ、今其顯著なる事例二個を擧げて催眠術の爲め其寃を雪がんとす。

（一例）

學術の素養なきも多少金力を有するものは、先づ新聞紙上其他の方法によりて催眠術の効驗を盛んに廣告し、加之各町村の要所には、多少の月手當を給し置きて患者の勸誘に當らしめ、施術は無料なる上に飲藥の必要なくして病氣は速治す抔と吹聽せしむる故施術當日となれば遠近より寄り集まるもの實に數百人に達す、然るに如此多數にては一々患者に接することも出來ざるより恰も十八世紀に於て「メスメル」が考案したる例の

「バケー」の法を聞き出したるものか、彼等は三十人を一組として大廣間に整座して目を閉ざゝしめ然る後ち大喝して眠れと命令す、然れども「メスメル」に非らざる欺瞞家の、斯る兒戯に等しき施術にて何條感應あるべきや、實に笑ふに堪へたることにて至る所に失敗せるも理なり、然れども此種の施術者は多少餘資ある者なれば時として晝飯位は患者に振舞い、其甘心を求むるに務めたれば未だ素人より甚しき攻撃を招かざりしが如きも、斯術の興起に容易ならざる打撃を與へたるは爭ふべからず

（二例）

全く資産もなければ德義心もなき無賴漢等の遺方は之を前例に比すれば一層陋劣なり先づ各所に隱現出沒して巧みに人心を蠱惑し而して施術日には旅人宿の座敷、若しくは料理店の廣間等を借り切りて、客を待つに寄席の木戸番の如き者を置き、五錢でも十錢でも貳拾錢でも取り放題こして廣間に誘ひ施術すること前例の如くす此輩の爲すこと言ふことは徹頭徹尾欺瞞を以て瞞つるが故に失敗したる土地へは再び足を入るゝ能はざる爲體なり豈に顰蹙すべき事ならずや

該二例の如きは實に學術界の「バチルス」にして、斯ることは世道人心の敦厚ならざる今時代に於て免かれ難きことゝは云へ、會々之れが爲に反對論者に好辭を與へて、斯道の眞理を湮滅に歸せしむるに至ては、學問の爲め遺憾

之に過ぎたる者は無し、余輩は大方具眼の士の、深く此邊に意を致されんこ
とを切望して已まざるなり。

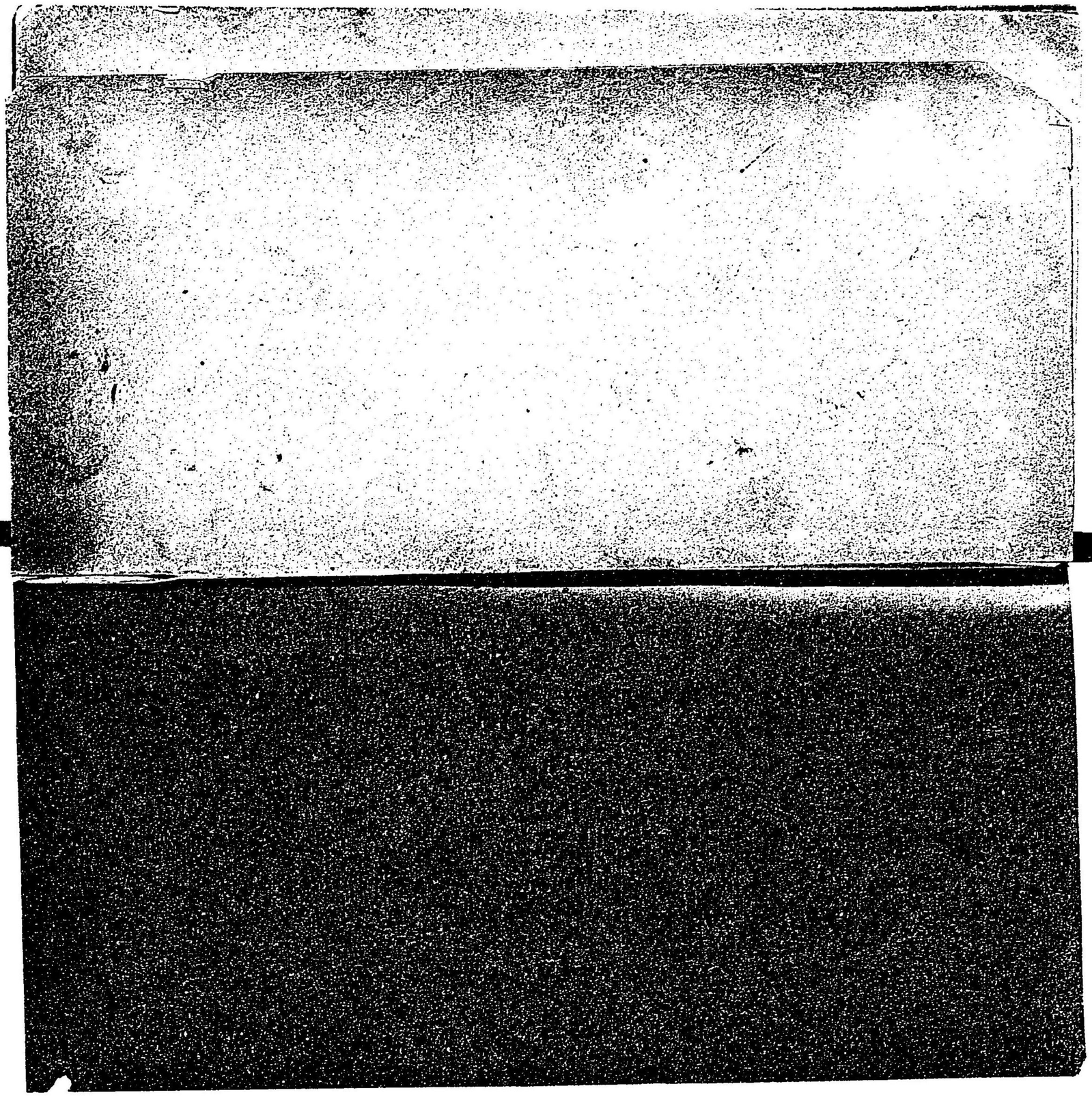
百五十

明治三十六年九月一日印刷
明治三十六年九月十日發行

定價金五拾錢

著作兼發行者　山崎增造　鄕岡縣掛川町掛川二百三十五番地
印刷者　山村郁作　東京市京橋區京橋水谷町七番地
印刷所　日進舍　東京市京橋區京橋水谷町七番地

發賣所　東京市芝區愛宕町二丁目十四番地　尙綱堂書舗



96
3/7

Ⓜ

058613−000−7

96−317

催眠術及感応療法

山崎　増造／著

M36

CBC−0135